

92  
86

維新後の人物と最後

岩崎 祖堂 著

004085-000-0

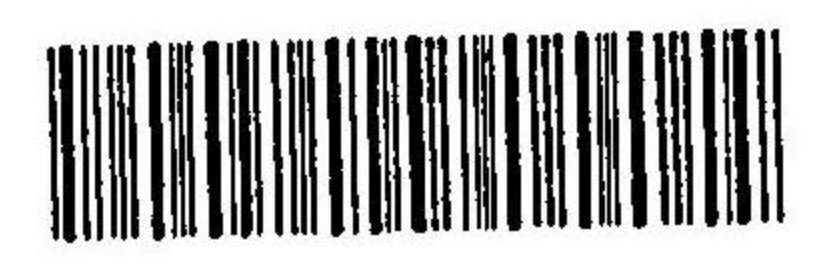
92-86

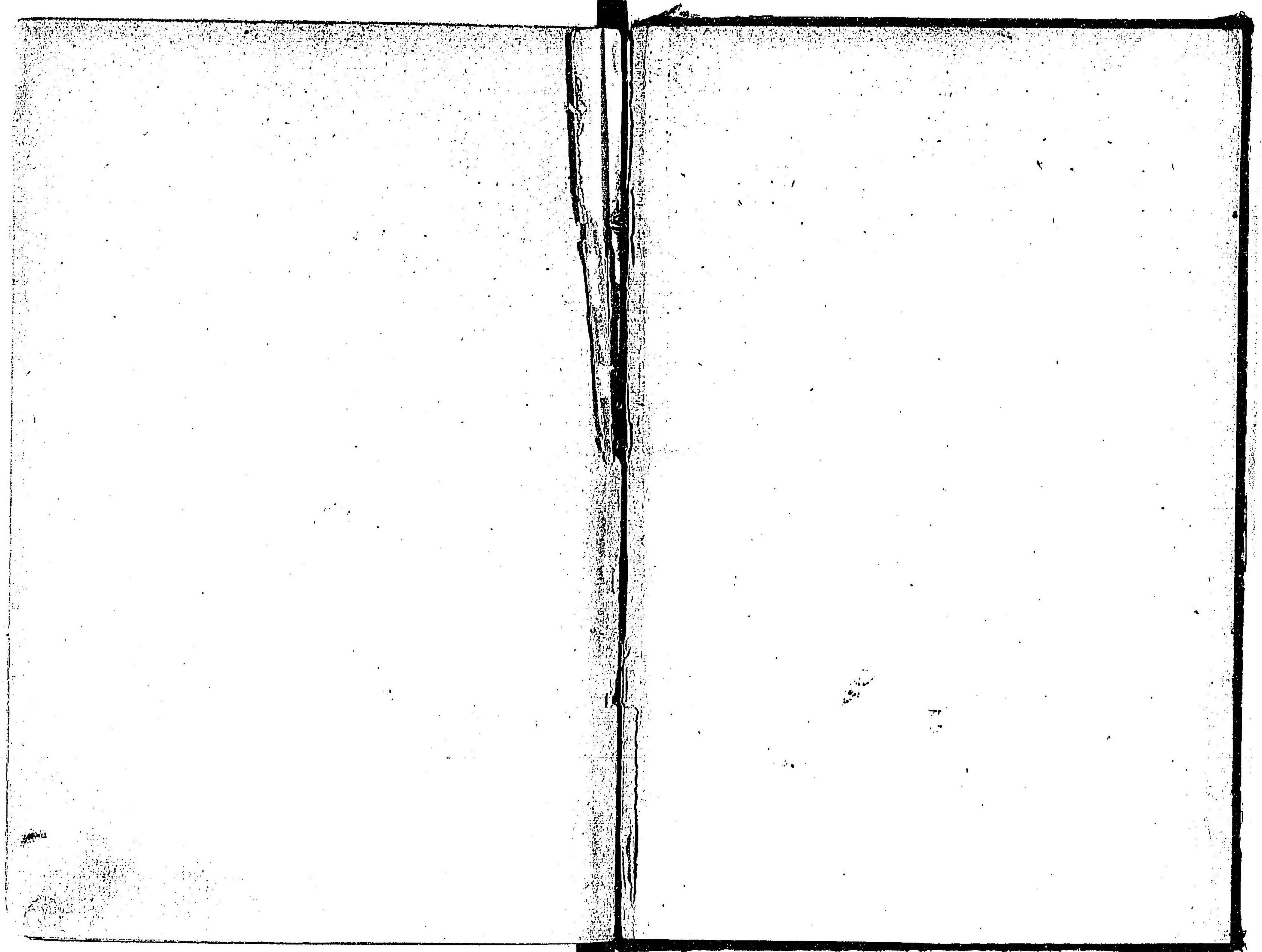
維新後の人物と最後

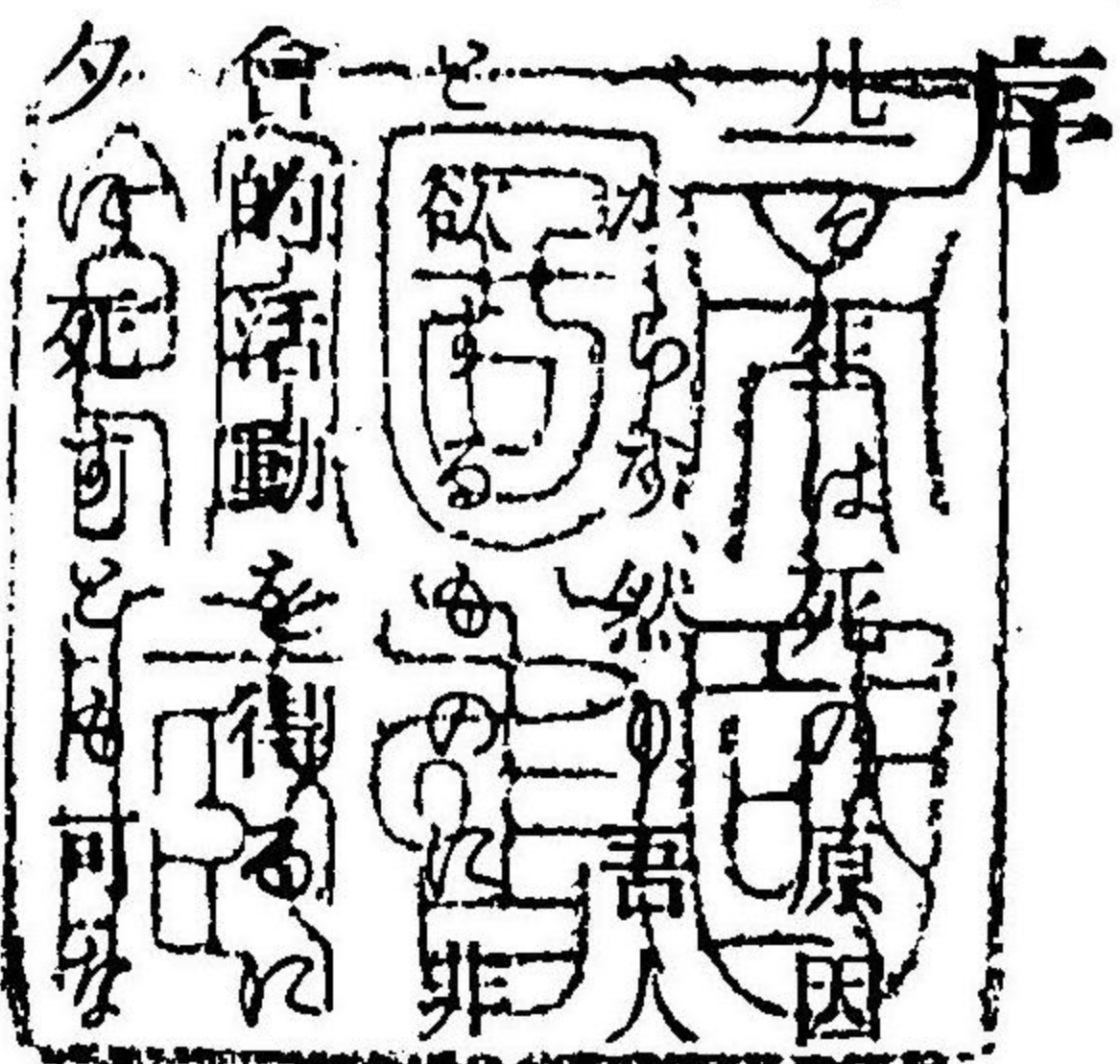
岩崎 祖堂 / 著

M35

ACE-0426

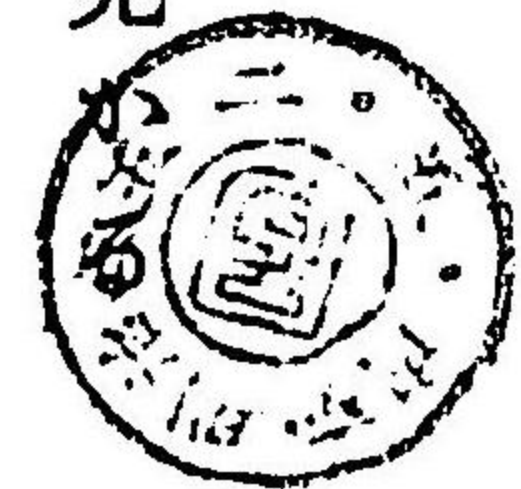






九序は死の原因なり、之れ實に天理自然の常則にして免れざる。然るに吾人は敢て千萬の長壽を希祈し、鶴龜の命を得んと欲するもの非らずして、寧ろ吾人が生存中の行爲か、全く社会的活動を得るにあらは足るべきなり、吾人曰ふ、朝に道を聞て夕に死すとは可なりと、宜なる哉、吾人は何の爲す所なくして、空しく世の米喰蟲と以て生息するの徒と相待たんや。

然り而して、吾人が生存中の行績は眞に死後の歴史也、未だ道を聞かず、又歴史上の成功を見ずして、世を相去るか如きは元より風俗の常たり、豈之れを偉人士の行と比すべきや、蓋し遠い哉。夫れ物の見るべく、味ふべきは、彼れの最後に在り、其最後や幾多の趣味を存し、又幾多の眞理を有す、而して人生の目的は道を知



るにあり、其結果は名を残すにありとす。  
今や此著を世に公にせし所以のものは、實に明治昭代に於ける人物が如何に經世事に當り、又如何に其最後の歴史を、吾人に傳へしかを、普知せしめんとするにあつて存す、世の所謂忠君愛國の志士たる者、宜しく之を一續して、以て先人の行に則る所あらば、著者の幸榮何ぞ之に過ぎん也。

明治三十四年嚴月

### 著者識

### 推新人物の最後目次

#### ○星 亨

星亨とイロハ。伊庭とアルタド。政治家としての星亨。學者としての星亨。星亨の最後。星最後の演説。星最後の諧謔。

#### ○森 有 禮

森の家系。森の幼年時代。森洋行前後。藩刀廢止と其主唱者。森と李伯。教育家としての森。最後の森。

#### ○西 郷 南 州

南州と徳川幕府。南州と日照。南州の最後。

#### ○田 中 平 八

天下の糸平。糸平の最後。

○木戸松菊

維新と木戸。名譽の最終。

○山岡鐵舟

鐵舟と劍法。能筆と禪學。鐵舟の最後、鐵舟と其絶筆。

○陸奥宗光

出獄後の宗光。日清戦争と外相。宗光の最後。

○桐野利秋

猛勇と其實戰。利秋の末路。

○江藤新平

改定律例と司法卿。新平と兒童。新平の最後。

○後藤象次郎

多情の後藤。象次郎の最後

○大久保甲東

大久保と征韓論。甲東と其實權。甲東の

○勝海舟

海舟と開港。海舟と敬字。海舟の最後。

○玉乃正履

平生と其長所。五龍の最後。

○末廣鐵腸

獄中の鐵腸。鐵腸と米國遊學。小説家としての鐵腸。鐵腸の最後。

○沼間守一

沼間と雄辯。沼間と兄弟。沼間の最後。

○福澤諭吉

福澤と洋學研究。福澤と慶應義塾。福澤と天橋。福澤の最後。

○中野梧一

奥羽戦争と中野。官海に於ける中野。實業家としての中野。中野と藤田。中野の悲終。

○河野敏鎌

河野とブーカス事件。江藤新平と河野。河野の最後。

○山城屋相助

廿万圓と生糸商。借財と一命。最後の自及。遺書と遺歌。

○新島襄

教育實現の視察。訣別と演説。私立大學設立と苦心。襄の最後。

維新の人物の最後

星亨(對シーザー)

星亨は自ら日本のシーザーを以て任せり而して吾人亦之を許す實に星とシーザーは其任行に於て其目的に於ても相類似せる處多かりければなり而して此偉人は殆んど同様なる最後の歴史を残しぬ。カイウス、ユリウス、シーザーは羅馬の人有名なる舊家パトリチアン家に生る幼にして學を好み長じて后博學多才を以て賞揚せらる彼れは紀元前六十年に大盟を遠せんが爲めに一子ユリアをポンペイに嫁せしめ且ツクラッスを率ひて以て三角同盟を作る紀元前五十九年に至りコンサルシップ議官となり約數年間ソールの政府を掌握せり后ち再び舉げられて同政府の主裁者となられ之れ實にシ氏が大盟を遂ずるとの端緒たりし彼れは此時已に羅馬の全權を握らんとの大盟を企て着々實行の途を進めむ爲めに兵隊の設備を要するに至れり五十年此間殆んど

八年八回の戦争を試みぬ彼れは五十年の春に於て兵三百隊をアルペス山の彼方に残し己れは居をロヨルに卜せり而して其軍隊やシヨル及びモルソン人より組織せられ然かも嚴肅にして強猛なる兵士なりし全軍彼れの爲めに深服し水火を敢てせざるのみならず世界の端にも突進せん程の決心を有せり其一度戦ふや必らず全勝を占めざるはなかりき。

其後彼れ等が糾織せし三角同盟は破れたり彼れ同盟者の一人たるポンペイは其性行として人の下風に立つを好まざるの氣ありシッサー又同方の人と事を共にするを好まず先づ己れが主裁者となり主領となるにあらざれば止まずと云ふ所謂二者性格の不兩立は遂に不和の種子となり原動力となれりボは茲に意を決して全く同盟を脱しアリストクラツク派に投せり之れよりシ氏に反すシ氏の勢力や貴族の大部に向て一大恐慌を來せしを機とし貴族等の不快を至れりとし唆して共にシ氏に抗す四十九年に至りシ氏はコンサルシツアの任期充ちぬ彼れは尙ほ自から其再任に衝らんと決す忽ち之を時の議院に要求する所ありし然れども遂に目的を達せしめて五十年十一月十三日彼れは其資格を失ひぬ蓋し此處置

たる不當に出べしと雖どもシ氏はポンペイとの平和を維持せんを欲して敢てせずボ氏も又彼れと共に其職を辭するに於て他意なしとし直ちに此れを辭せんことを宣言せり。

然るに時の議院は彼れの宣言を拒み且日を期して軍隊の解除を要すし之れに應せざるあらんか彼れをして國賊と見做すべきことを議決し直に宣言せり之を耳にせるシッサー大に意を決して軍隊を率ひて羅馬に歸らんとロビコン川に至り暫し熟考する所ありしが后深く意を決し同川を渡れり六十日間に於ける彼れの苦心や蓋し測る能はず彼れは爾後コンサル及びシクシアを以て自から任命しぬ茲に彼れは卓一なる政治家たるの伎倆を顯はし以て輿論を喚起せり后ファツアの血戦にポンペイを敗りボは逃れてインブトロに入りしが時の帝王トリッサーに捕はれて慕なき最後を遂げぬ。

彼れの大敵なるシッサーは之を知らせインブトロに攻入るや帝王トリッサーはシ氏をボの死骸に介しぬ寛大なるシ氏見て之を大に悲み厚く祭する所なり恰か上杉謙信か武田信玄の訃報に接して嗚呼手れ好敵手を失ひたりと慘然涙みりし

時を追想して、轉々同情を表せざるを得ざるなり、續て女王リネアトヲを助けて、トリシニ帝を殺し、ボンタスに進みて、プアルナーセスを、一戰の下に破り、ボンペイの餘黨を打滅せり。

四

紀元前四十六年の夏、羅馬に凱旋せり、時已に羅馬の共和政治は倒れて、氏は全く實權を握るに至れり、彼は直ちに十年間の主裁に任せられ、次て永久の主裁者となりぬ、續て帝王の稱號を奉せらるゝに至れり、嗚呼、偉なりと云ふべし。  
元來、氏は性剛膽にして、聰明加ふるに、奇才能く、世を歴し、而して卓識あるの政治家たり、星亨は將さに、其性行に於て、氏と相比すべし、彼れは羅馬從來の政務を、全し、根底より改革せんと欲して、思へらく、隆盛と平和を求めんとせば、宜しく共和政治を脱して、君主的專制政治に則り、一主權下に、政務を全ふせざるべからずと、確信し、彼れは法律を蹂躪して、權力を作り、之は善用せんと企てたり、彼れは黨派の區別を去つて、人才を登用せり、彼れは全く果斷にして、正實なる内閣を組織し、農商を獎勵し、寺院劇場或は公堂を建築して、以て羅馬の内外を刷新しぬ、時に開墾して、タイバア川を作り、太陽曆を改めて、太陽曆となし、此をして、羅馬帝國を無限に擴張せん

とせり、彼れが、ロヒン、ン川を渡りて、以來、僅々二年の星亨を経過して、斯る大事業を成就せし、の一點に徴して、彼れが天物たることに驚かざるを得ざるべし。

紀元前四十五年、ベルカリアの大祭に於て、議院より彼れに王冠を奉りぬ、彼れは之れを拒絶したり、蓋し、全國民が此舉を見て、不快の色を顯はしたるを察したるあれば、なり夫れ此の如く、彼れの權力の宏大にして、其榮榮や無限たり、然れども、榮枯盛衰は、天則にして、免かるべからず、彼れは四十四年三月十五日、彼れの政敵たる、アルタアの爲めに、無慘の最後を遂げぬ、歳五十有六。

カイウス、ユリウス、シーザは、議院に於て、フルタスカス、カト等の手に斃れたり、彼れは世に又たなきの人傑たり、彼れは嘗に有名なる政治家を以て、社界に賞揚せられたる人物たるのみならず、軍隊に大將として、果た立法者として、演説家として、歴史家として、數學家として、工藝家として、萬能を兼備せし、偉大なり、此偉大や、或一部の反抗に會し、遂に兇手に斃る、嗚呼、惜しむべきたり。

彼れに容貌、凛乎、一見、能く人をして、感服せしむるの風を備し、天性や、恐るべし、毛髮又美にして、眼光、黒く、愛情口、に充つ、將を備へざるなり、星亨亦能く、氏に酷似す、彼が

五



六  
幼を慕わしむ之れ實に英雄の常なり吾人は知るべし一世ナポレオンの半生を又大に似たるあるを。

星亨は近來稀有なる東洋の大政治家なり管に政治家たるのみならず法律家演説家教育家たり而して又シ氏も其最後を同ふす彼れは羅馬の内政を革め諸業を厲督して以て羅馬を文化せしめたり彼れの偉業や實に大なり其芳名を万載に存す宜なり星亨は政治家として先づ日本現時の黨弊を革め進んで黨政政治の實を擧げんことを企てたり黨人皆彼れに威服し向ふ所敵なきが如し其勢力の絶大なる未だ彼の人物を見ざりしなり吾人は知るべし政友會の勢力を彼れは實に星亨の力に依つて得たるものなり我輩は寧ろ伊藤侯の政友會にあらすして星亨の政友會あることを斷じて疑はざるものなり彼れは教育事業の不振を嘆じて自ら教育界の人となり東京市の教育會々長となり以て從來の教育方針を改めて積極的進取主義たらしめんとせり彼れは禁殺の下に於ける東京の市政紊亂を概して自ら其局に當り市政を根本より脱去して新空氣を注入せんと計せり其業や偉大に

して其志や赤誠なり然るに計らざりき半途にして兇漢の手に斃る嗚呼悲むべし惜むべき哉

彼れは齡未だ五十有二彼れが企望の万分の一を遂ぐる所なくして世を去れり若し此の偉人をして尙ほ數年を假らざらんか如何なる事業如何なる偉勳を奏したるや蓋し測知する能はざるべし

然るに兇漢伊庭想太郎は世の浮説に驅られ遂に星亨を刺せり國家の爲なりとして國家的人物を殺害せり何を夫れ狂せるの甚だしき哉而して星亨今や無し彼れが意志未だ功を見せど雖も十數年の后には之れが目的を達し得るの期に會するを見るべし忠臣楠正成逆賊足利尊氏を攻めて勝たず遂に湊川に戦死す楠公未だ目的を達せずして世を去りしと雖も公の意思公の目的や實に今日に於て成功せるに非らざるなきか星亨たる者宜しく地下に瞑して可なり

伊庭とブルタア

ブルタアは政友たるカイウス、エリウス、ローザーを議場に倒して名聲を天下に博

したり而して歴史上の人とはなりぬ伊庭想太郎は東洋の大偉人たる星亨を東京市参事會議場に刺殺して兇名を社會に残したり二者何れも一政治家の生命を奪いたるの事實に至りては同一なりと雖も其目的と其結果に至つては蓋し雲泥の差ありと云はざる可からず余輩之を詳論するに先ちブ氏が議場に於てシ氏を倒したる當時の状況を明かにする所ある可し。

シ氏は羅馬の主裁者たり其一族より興つて遂に羅馬の帝王とに奉せられたり彼れは羅馬從來の共和政策を革刷して帝國主義專制政体主義たらしめんとせりブルタア、カスカアの諸氏之を概して遂に彼れを議場に刺せり其初め氏の行を難して氏を暗殺せんとするの徒日を追ふて起る恰かも四十四年三月十五日に當りけん彼の徒一舉してシ氏の暗殺を實行せんと風の風説を傳ふるものあり偶々シ氏の親友之を聞てシ氏に會し告ぐるに前陳の事實を以てし議會に臨むの不利を注す然るに彼れは之れに従はずして議會にあり席を占むるや敵の多數は氏を圍みて之を擁す計らざりさある者は進みて要求あらんかの如くして彼れシ氏の上をを取り之をシ氏の面部に覆ふるや后部にありしカスカア武器を奮つてシ氏の肩

先を目掛けて切り込みしが的外してシ氏の爲めに捕るシ氏カスカアに向ひ叫んで曰く無禮なりカスカア汝何を爲すかと彼忽ち避す斯かる間に傍に在りし敵の多くは一舉してシ氏に向て打ち込みぬ彼れは暫時防戦を試みたりしか偶々政友ブルタルの手に劍の閃くを見るやシ氏大叫一番して曰く嗚呼汝も亦然るかと茲に敵すべからざるを知り意を決し自から衣を以て面を覆ひ敢て抵抗せず彼等の自由に任せぬブ氏の徒黨相見て得たれりと爲し忽ち括り込み然かも二十三傷を負はしめぬ衆寡如何で敵すべき途にハハハは政治上の大敵たるポンベロが背像の前に倒れぬ嗚呼何を其の無慘なる之を聞く者誰れか慄立せざるものあらんや。

シ氏は遂に親しき政友ブルカアの手に斃れたりブ氏何の目的あつて時の英傑たるシ氏を斃すに至りたるか之れ余の説かんと欲する所なり。

シ氏はコンサルツブより遂に羅馬の帝國となり舊來の羅馬政体たる共和主義を撤して君主政体所謂專制主義たらしめんとせしにあり此一事實に羅馬の國政を根本より破壊せんとするにありしブ氏之を聞き彼れは實に國の安寧秩序を破

るの甚だしき共和政を變じて帝國政体たらしめんとするは、即ち之れ國賊なり此  
國賊をして自由に跋扈せしめんか忽ち羅馬の滅亡を如何せん、余輩國民として如  
何で之れをば黙べけんやと直ちに一身を犠牲に供してシーターの生命を奪いし  
なり、我輩は信じて時の情体より觀察すれば、ブ氏の舉又全く然るべし止むを得ざる  
の結果に出でしものと云ふべきなり、然れども星亨に對する伊庭の行や大に之に  
反するあるを知る、彼れは世の流言浮説に迷ふて前後を思慮せず、武士道に馳られ  
東洋の偉人を刺せしなり、彼れは幕末當時に於ける所謂刺客の流行を夢みて遂に  
狂事を演じたり、彼れは星亨が果して悪行を働きたるや否やを精査する所なく、し  
て只單に星を刺害せることを目的とせり、否な彼れは全く星亨と云ふ大人物の性  
質を知らざるものなり、若し假りに星亨に於て惡徳汚行ありとすも、彼れの偉業  
と相殺し得べきか而して星亨の生存は國家に對して幾何の害やある若し亨をし  
て今日ありしかば、國家の受たる所の危害や若干ぞ亨を殺すにあらざれば、之を豫  
防すべき他に方便を發見し能はざるか、彼れは星亨の自由を奪ふもの天下に絶へ  
て無しと斷念せしか、果して然りとせば實に其淺見にして、其愚なるに驚かざるを

得ざるなり、余輩は徹頭徹尾彼れの行を目して、狂の結果なりと論結せんと欲するものなり。

政治家としての星亨

泰西果決壯烈魁偉之を望むに昂然之に就て温乎たる者實に星亨君の平常に之を  
見る君は現時日本否な東洋に於ける唯一の政治家たり、其動作の輕敏にして、其畫  
策の快妙なる古今未だ嘗て君の如き人を見ざるなり、彼れは實に世界の大勢に鞭  
ちて、五洲の風雲に乗じ、一代の俗論排闥して、主民理想の爲めに奮闘して、以て大和  
民族をして大國民たらしめんとの大抱負を有する人物なり。

星亨は政治家として政黨の主領として當せし人物也、彼れは克く政海に猛進し突  
飛せり而して間斷なく奮闘を試みたり、彼れが唯一の目的たる黨派の前程に  
向つて一刻も休止せざりしなり、否な彼れの黨派的闘争は實に彼れの生命たりし  
やも知るべからざるなり、彼れは政海に身を投じて、以來縦横無盡の手腕を揮ひ以  
て能く難關を破ふり、一頭角群政治家中に顯はれたるは吾人の深く敬嘆する所な

近くは憲政黨を組織し、政友會を創て、政黨の宿弊を根本より革刷せんとしたるが如き、或は東京市政の紊亂を憂へて其局に衝たり、一大改革を施さんと欲せしが如き、又或時は米國に全權公使となり、日本帝國の勢力と國輝を海外に示したる如き、一度内閣に入り、他閣員をして一舉一動、唯だ諸々君の意見に服せしめたる如き、其議員となり、議場に顯はるゝや、議長に撰はれ、以て議院の秩序を整然たらしめたるが如き椅子を去つては、院内の總理となり、彼れをして其威勢に深服せしめ、何所風前の草の如く、敵なきの威を吾人に與へたるは、之れ實に星亨に非らずんば、何を以てか之を得へけん、蓋し他に求めて能はざるなり。

明治の世、人才殊に輩出し、政治の局面に多々濟々を稱す、然れども彼れの如き人格を備ふる者は、あらず、其他くまで屈する所なく、無盡の精力と其規模の雄大にして、理想の宏遠なる之れ、恐らくは星の外は見ざるべし、世に或は流風除韻、戰國の名將を以て任するもの、所謂蘇張亞派の辨を氣取るもの、清廉潔白の君子、正人を以て仮るものありと雖も、彼れ等は、一小嶋國の天地に、跼蹐する門前の瘦犬的、愛國家に過

さざるのみ、獨り世界の、大勢に鞭つて、五大洲の風雲に乗し、大和民族たらしめんとするの抱負あるの士は、實に星君を排て、他あらざるなり、彼れは、眞に我國國民の意を強ふせしめたる人物也。

星亨は我國憲法政治の大成を期せしめたるなり、此舉や直ちに君か最初の發足點にして、又最後の到着點なりしなり、然るに斗らざりき、一兎漢の手に斃る、吾人は此國民的人物たり、對外的人物たる星亨を、今失ふ之を悲しむもの、豈に何ぞ獨り政界の爲めのみならんや。

試みに見よ、彼れが死後に於ける社會輿論の聲を、彼の一派に屬する者は、勿論、其反對黨の面々、擧げて死を悲み、且此舉を難し之を公言せしに、あらざるなきか、其非送する者約五萬人に及ぶ、何を夫れ盛なる此一事は、以て君の衆望と、其人物たるを認するに足るべきなり、今や君の死は、政界をして頓に落莫の觀を呈せしめ、實業界に教育界に一頓挫を來しぬ、彼れの死は、實に其餘響の波及する所死と、共に其害や又大なり、彼れ兎漢は、其現在を知つて、未だ其未來を知らざるもの、單獨なる星亨を刺害したる結果は、國家の利不利を忘却したるものなり、彼等は何の考ふる所なくし

星君は馬鹿

て只た口に奸賊するは國家の爲めなりと公言す徒らに天下國家を妬にし人の生命を奪ふ誰れか彼れをして之を委任せしか彼又社會一部の意思を代表したるにもあらずるべし假令自から社會一部の代表者と自認するも尙ほ他の一部の意思に反して人の生命を奪ふか如きは論理に於て許さる可き事にあらざるや遠くはシイサルのブルターに於ける如く赤穂義士の仇討に於ける如きは決して彼れの行に比する能はず殊に赤穂義士の如き君父の仇を報して身を殺して仁を爲し以て君臣の實を明かにしたるもの誰れか之れを怪しまざるなり而して幾千載の後に至るも賞賛して止まずと雖ども伊庭の星に於ける之に反して全く痴狂を演じて以て國家の焦沙を阻害せしに過ぎざるのみ誰れか惘然せざるものあらんや政治家として星亨今や世に無き人となれり然れども彼れの人物と其成功は千載に汚さる所死せる星亨は生ける今後の政治家をして君の性行は貫はしめ幾年幾十年の後に至つて始めて君の意思を貫徹せしむるに至るべきは明か也公の爲めに死せる君は實に絶大の名譽として余輩の深く銘謝する所以なり。

學者としての星亨

今の元老に學者なく今の政治家に學識を備ふる者少なしと必ず彼れは徒らに時機に好遇して名を博し或は名を政治家に假りて己れを全ふせんとするに在り所謂彼れば政黨屋なる者にして余輩の決して政治家を以て認容する所の者にあらざる也苟くも政治家として世に立たんと欲せば須らく政治的素養なかる可からず未だ何の素養かなく一の特長も無くして獨り政治家を氣取るもの、心事豈憫然の極ならんや彼等か言ふ所甚行ふ所と一致せず切りに同勢を恃み空砲を放つ恰かも實力なき大國の兵卒を見るが如し初めはさも立派なる旗旒の下に整々堂々一聲と共に相進むと雖ども一彈の放煙を目するや忽ち離散す彼等は毫も兵備なくして戦上に勝利を博せんことを望む何ぞ夫れ愚の甚だしき殆んど評外と云はざるを得ず天下の事皆な然り實業に兵力にひとして實力を保有するに非ずんば何を以てか勝を占むることを得べき須べからく空想を去つて實力を養成せんとするは余輩の之を希望して止まざる所なり今や此一事を推して政海に及さん

が星亨の如きは實に實力を有する兵營なり、巨大の鋼鐵艦を有する海軍なり、政治家として耻ぢざるの人なり、又眞に素養ある人物なり、彼れが經歷は眞に彼れが實力を測量し得るの器なり、見よや、彼れは歐米の新空氣を吸收し、種々の學理と經驗は以て君をして今日の政治界、教育界、而して法曹界に併用しつゝあるにあらざるや、彼れが言ふ所且其行ふ所實に嶄新奇異、痛快を極む蓋し此伎倆や、彼れが實力の賜に因らずんば何を以て吾人をして深服せしむるを得べけん。

君が近來は政黨の首領と仰かれ、教育界主長と崇めらるゝ、所以の者眞に君が學理と實際の應用に遺憾なきを以てなり、試みに彼れが經歷に徴するあらんか、嘗て大坂大學の助教授となり去つて英國に學び、法學を修め、パリスの學位を得て朝に歸る、其間各國の語學を研究し、延ひて各國の政治理論の學に通ず、而して此素養と實力を以て事に當る焉、勝を占むるの明かなり、余輩君をして鋼鐵艦を有する海軍なりと評する豈偶然ならんや。

回顧すれば、維新以來政界に智者あり、才者あり、識者あり、雖ども眞に學識を具備するの人物を見ず、彼等は徒らに才智を驅つて、當座の伎倆を試みんとするの姑息

手段に出づ、其敢て當れるや否やは之を豫知する能はざりし、嗚呼、何ぞ夫れ拙にして險なる然れども、時の世態尙は之を以て足りし然れども、二十世紀の今日此かる瘡腕能く吾人をして首肯せしむるを得へしか、誰れか又之に服せん、然らば近時に於ける政治界の眞狀如何、我輩は信す、今の政治家とし、政黨家として自ら誇る者幾千人、然かも政治家として許す者數ふるに足るべきのみ、彼等の多くは學識なく、經驗なく、所謂小智小才を運用して、政界の人となり、時に議會中の人となり、或は人才登用を名として、就官を貪る、彼等は徒らに私利に吸々として、敢て國家的觀念を眼中に認めず、議會政黨官吏と云ふ一資格若くは國体を踏躓として、惡事を働き、時に表面代議士政治家に假り、裏面や眞に受負若くは周旋の業に足を投じ、東奔西走、只だ己れの腹を肥したり、彼徒又日本の政治家として、自から之に恥ぢず、公々然たるに至つては、誰れか痛嘆長息なき能はざるなり、彼等は毫も定見を具備せず、只利のために其本旨を曲す、敢て國家の利害に顧着せざるなり、余輩彼徒を目して國賊と命する、豈過言にあらざるべし。

星亨の如きは博識を有する日本の政治家たり、教育家たるの人物たり、君は獨り英

學に長せるのみならず羅甸西班牙佛蘭以太利獨逸等歐米文明國の語を通ずるを以て其大凡を證するに足るべし君が學識や諸外國の政治家に相對抗し政論を叩き得るの資格ありぬ眞に日本の政治界を代表して對外的關係を全ふし得らるべき伎倆を有するの人物たり君が多學は又た日本の教育界を代表し得らるべき伎能あり吾人は知る君が東京教育會に於ける演説の大要を君は口を極めて勿れ主義神主義の東洋儒流的教育を痛撃したる事を宜しく積極進取の主義を以て國民を率ゆべきを論したる如き今の學者にして此明論卓説を口にしたることの絶へて無き君が主張の嶄新にして誠に痛快なる余輩の深く心服して止まざる所なり彼れは實に東京市教育會長として賞揚するに足るべき人物也世の所謂教育家たる者世界の趨勢を省みることなくして徒らに支那流を摸し隱居主義的の教育方針を試むる者のみ今日の有爲時代に於ける尙ほ且つ廢的人物の性行を慣授せしむるの弊あるは吾人の現に之を目撃する所宜しく此宿弊を一洗して以て有翼の教育方針を施し將來我國民として學ぶべき典型となすは之れ眞に教育家たるもの責任と云はざる可らず以上論ずる所よりすれば星亨の主張する積極進取的

教育の方針は一日も早く實行して舊來の一大弊風を改むべき吾人の急務と爲さざる可からず  
要之星亨の如きは多能多學故に萬局に向て敢てあるなきは元より理の當然にして毫も怪しむに足らざるなり今の政治家として學識あり今の學者として能く世務に通ず余輩星亨をして深く崇敬する所以のもの豈に決して一朝一夕にあらざるを知るべし

星亨の最後

嗚呼可惜は星亨の最后なり抑も惡魔は星の偉才異能を嫉んで之に禍せるか國家の爲めにせんと欲して却つて國家の爲めに大害を興へたり彼れは有形の星亨なるもの、生命を奪ふて其精神を奪ふことを忘れたるものなり彼れが淺薄なる思想は社界の一部の言語を輕信したる結果此かる暴舉を企てたるものなり一人の星亨は個人的星亨たることを知る國家の星亨あるを知らざるの誤謬に出でたるものなり

星亨は世界の人物たるだけは彼れは非常の抱負と絶大なる志望を有せし人物なり然るに彼れは事業の半にして惡漢の爲めに目的を阻害せられたり而して彼れは如何なる最後を以て終りたるかは宜しく吾人の記憶に銘せざる可からざる所となす。

時將さに卅四年六月廿一日の事にてありき此日は東京市參事會定日に會し石山購入案及ベスト豫防費案の提出ありたる爲め星亨は定刻より出席し他參事會員市長助役議員等悉く出席し會議を開きたるに午後三時四十分四谷區學務委員伊庭想太郎は紺紋羽織に袴を著し禮儀を正ふして市役所正門より入り來り市參事會室の門を排して先づ書記等に一體し后ち星亨の側に進み來りしが其沈着なる態度と温和なる相貌は毫も參事會員注意を惹かず伊庭は夫れより星亨の後に廻りて左手に星の肩を抑ると同時右手にて懷中せる匕首長一尺二寸を拔出し雷光火石の勢を以て星亨の右脇腹を穿れど刺貫き彼れ惡漢は大聲にて國家の爲めと呼はりたり傍らなる參事會員は此慘事を見て立上る間もなく第二刀に星氏の右肩胛骨部より拳下りに突込み一扶り扶り更らに止刀を刺さんと身構へたる

を居合せたる參事會書記平賀信恭は伊庭の後より確と抱き付き持てる匕首を奪いたり此時惡漢は自若として曰く我は四谷の伊庭想太郎なり見恭しく騒くなど大鳴しぬ一同は直ちに彼れを繩にて捕ふべしと罵りしも彼惡漢は余は決して君等に危害を加ふる者にあらず故に縛すべき必要なしと床に墜れし星亨を顧み冷かに笑ひぬ此時幸ふじて急報に接し來りし巡查は忽ち彼れ惡漢を圍繞し市役所正門脇の見張所に赴きたり不意を打れたる星亨は伊庭の近くに來りしを知らざりし有様なりければ初大刀は勿論肩口の二の太刀迄痛く刺し貫かれし事なれば伊庭の襲撃を抗拒すること能はず駈附けし警視廳警が人工呼吸を施さんとするや苦痛に堪へずやありけん身悶じて手を僅かに握り何事か言はんとせしが遂に其儘絶息したは此時同席の市參事會員負傷し吉田佐藤の兩助役平賀書記も亦た手の掌及び腕等に微傷を負いたり之れより后ち惡漢伊庭は警視廳に送らるや彼れは警官に向ひ自分國家の爲めに悪人を除きたる者なれば此儘護送されたと述べ警官も又異状なしと認め遂に捕縛せず人力車に深く母衣を掩ひて伊庭を乗らしめ途中の亂暴を防ぐため十數人の巡查は車の前後左右を嚴重に取り圍み



徐かに警視廳に護送したり然して星亨の死骸は車子掛を以て掩ひ市參事會室の入口は嚴重に鎖鑰を施こし人の出入を拒ぎ自邸を始め其他へ電話を以て報じたれば午後四時四十分に至り地方裁判所より豫審判事檢事出張して委細檢視を終りたる后ちに遺骸を自邸に送るの準備を爲し更らに新しきテーブル掛けに包み擔架に乗せ階下に運びて星を無用の馬車に載せ赤坂の自邸に送りたり而して屍の創痕を檢するに實に左の六ヶ所にして第一劍は全く致命傷たり

- 一 右腋下に刺傷深さ肋間より肺部實質に達し鎖骨下動脈及靜脈を切断し多量に出血す
  - 二 左腋下に刺創あり深さ肋間に達す
  - 三 後頭部に長さ凡そ五寸位骨髓に達する切創あり
  - 四 背部深さ凡そ二寸位刺創あり
  - 五 腹部に凡そ深さ一寸位刺創あり
  - 六 左肩胛部切創あり微傷
- ジュリアス・シーザーが刺客の爲に殖れたるは實に金曜日なりき而して星亨の刺

客の手に殖れたるも亦實に此金曜日なりしなり偶然の奇合豈奇ならずや此の如くして有名なる星亨は歴史の人となりぬ嗚呼其歴史よ  
最後の一言星亨が伊庭に刺さるゝや一言をも發せずして即死したるは目撃者の認むる處なるが伊庭の自白に依るときは彼れが市參事會室に闖入して星氏の背後に廻り改心したかぞ大喝せしに星氏は見返り伊庭を瞰み下れと云ふや否や伊庭は短刀を取り早くも星の右肋を刺通したるなり嗚呼悲むべし惜むべきは彼れ豪傑の最後なり

星 最 終 の 演 説

星が六月十六日東京市教育會席上に於ての説演は抑も又最終と云はざる可からず而して如何に其論旨の切妙にして首肯するに足るべきかは吾人の宜しく味ふべき處となす余輩聊か左に之を略載して吾人に紹介せんとするに切なるものなり  
凡そ教育事業に關しては最も公平なる考を以て當らなければならぬのである

世間には星亨が政黨員たるの故を以て兎角の評を爲すものがある。成程我輩は黨派には最も熱心を極めて頑固と自ら信ずる事亦た決して人は譲らぬ積りである併し乍ら教育上に對して政治上の如き黨派心を挾む如きことは予の斷じて爲さざる所である論より證據で本會創立の際予の指名に一任せらる評議員の顔觸を見ると予の推薦が如何に公平なりしかを知る事が出来るであらうと思ふ從來我國に於ける教育の方針を觀るに世界の趨勢と相伴はざるもの頗る多きが如き有様である我國古來の教育は専ら支那流を模倣したる結果として總ての事が何々する勿れする勿れ斯くすべし道る可し取る可し進む可しといふ所謂進取の氣象を涵氣す可き教育が無いのであるから徒らに小康に安んずる所謂隱居主義嶋國主義に陥るである世界の趨勢は即ち進取主義であるから將來此消極主義を棄て、積極の方針を取らねばならぬのである。さらに小學の教科書として個人の編輯したるものを採用するは甚だ宜しからざる事である。又儒者學者の言行を多く書いたら歴史の如きも専ら社界的人物の性行で記するものが多いが今日有爲の時代は於て斯の如き迂濶極まる人物の性行を兒童

に教へて何の益する所があるか、一人の學者が雪隠に考ると多くの人が大廣間で考へるのとは必らず經庭の差があるのであらうと思ふ予が明治二年頃大坂に於て大學分校の教授をした事があるが其時などは實に不平で堪まらなかつた夫は何故かと云へば先生と言はるゝ連中は教育といふものを除外的にして唯薩長若くは學閥と云へるものゝみに重きを置いたのである故に余は直ちに辭した事があるが夫れから何も大學のやる事が總て氣に入らぬのである卒業すれば直ちに役人になる出る者ゝ孰れも甘んじて非立憲的小役人となる斯んな根性で何が出来るものか此れは強ち學者の悪いのでなく教育の方針が宜しく無いからである東京の大學は勿論京都の大學も今日の儘では少しも信頼する事が出来ない故に余は官立の大學は御免を蒙つて専ら私立大學の勃興を奨励しなければならぬと考へる夫れ慶應義塾若くは早稲田大學の計畫の如きは予の最も望を屬する考である唯我國には米國の如く教育界の爲り奮て私財を養殖するの篤志者なきを甚だ遺憾とするのであるされば資産家として此觀念を起さしむる方法を講ずる如きも亦本會任務の一であると言はなければ

ならぬのである云々。

星最後の諧謔

人物と最後

六月廿日總理大臣官邸の披露會に於て庭園に沿う一室に松田、杉田、元田、新井等の諸氏と椅子に寄り雜談餘念なき折柄恰かも中央に坐を占めたりし星傑に云て曰く近日一同相會して何か面白き遊戯を爲て遊ぶは如何余は思ふ勝負會をつけ基將棋を戦はし勝者が好める食物を敗者が購擧するとせんと之を聞ける坐中の者異口同音に賛成と呼ぶ偶々某云て曰く星君の目論見所甚だ可然れども甚將棋を知らざる者は如何曰く甚將棋には限らず勝負會なれば其何たるを問す双五六藤八相撲、擊劍、腕押、テロポ一等面白かるべし然し勝負の決や議論の起るなきを得ざる可らず故に此點に向つて最も公平正直なる片岡、江原の兩氏に行司を頼むとせんと一同笑の中に大賛成と呼ぶもの、偶々大岡氏來るに會す星氏大岡氏に向ひ君は淨瑠璃を爲さるべし傍人曰く淨瑠璃に勝負は如何と云へば答て曰く又外の者が試みて何れが其上速者なるやを比較し結局上手を勝とすべし傍人曰く大岡

森

君と淨瑠璃の戦を試まば駭ねばならぬから戦ふ者はあらざる可しと一同互に笑ひ興し居たる所へ桂大將入り來られ何か面白き事あれば加入すべしと言ひつゝ傍らの椅子に寄られし時は滿面笑を含み勝負會の説明をせられたれば大將は之を聞て相共に打興し果ては大笑しぬ后星は幹事及び會場は何れに致さんなど物語られぬ是れを君が語りをさめども云ふべきか神ならぬ身の此兎變を知るよしもなし發起の星は不歸の異域に旅立ちせらる其時座邊に在る者は皆な黒服を着し野邊の送をなすに至らんとは果なき事と云はざる可からず。

森有禮

禮

我が國古より幾多の英勇豪傑現出せし者一にして足らざと雖も是れが因たる其四面の社交的の感化教育に基かざる者なし薩藩累代の英を相繼ぎ善美なる薰陶より多くの人傑を生じ殊に維新の前後に最も其旺盛を極め此の大偉業興りて大に其効顯然たり而して其最も嶄然頭角を顯す者を西郷、南洲、大久保、甲東の二人となす其他若少の俊才ありと雖も多少此の兩雄の教化に頼らざる者なし唯だ鎖細

だも南洲甲東の蕭陶を受けず薩藩に卓越し精實に身を寒村避陬より現し獨才を振う事二十年遂に卿相の地位に至り社界の耳目を聳動せし者吾人森有禮なるを然らん實に一世の英たるを失はざるなり。

君は鹿兒嶋城山の東北方にして山降りて谷を作す是れを岩崎谷と稱す彼の西郷南洲以下の其最後を遂げたる所なり而して此岩崎谷と一岡岳を隔て、表裏をなす之を城ヶ谷と稱す城市に連なると雖も宛然たる山脈間の一村落なり而して戸數僅々百に満たざるべし。

森の家系

此處に森喜右衛門忠恕なる人あり藩の士族なり文化の始めに生る成長するや性質寛厚殊に善良の性を以て仙骨の性あり妻を阿里と稱す忠恕より三歳若く岡崎に生る是れ忠恕の再度の妻たり而して忠恕は五男を擧げ君は其の末子にて弘化四年七月十三日を以て生る后ち通稱を金之丞と稱す長を喜藤太次を喜八と云ふ喜八より二歳を異にするを三熊と稱す其の次を喜三次と云ふ喜三次より四才を

隔る之れ則ち余の記さんとする有禮なり彼れの兄弟は郷の先輩にて五代藤太其弟に才助(友厚)なる西洋の事情に精通し殊に多年長崎にあつて蘭學を修讀し益々西洋の有様を知るに至る森兄弟は皆な之を師となし教訓を受け亦た薩摩の儒者詩人として其名高かりし横山友容なるあり鶴訂と號す博學多才にして詩を能くす神童の聞へあり慷慨の氣象慷慨乎として胸中に滿自ら經歷を有す森兄弟擧て横山氏を師に仰き感化を受く其の功や尠少ならざる推して知るべし。

森の幼年時代

森の教化は父よりは寧ろ母の力に依る者にして家計富裕ならず僅少の家財を傾けて是れか五子の教育に力を盡す然れども父は放任主義なるも母は嚴肅にして頗る剛強の意思を有し氣象又た男子の如く蓋し子の教育は頗る母の主たる事なりと雖ども森氏の場合に至りては母の感化力深しと云ふ。

君は亦た聖堂藩の學校遺士館孔翁二廟とす故に聖堂と云に學び漢書を修めしか如何にもして洋學を研究せんと年十二三才より志ざしを起したるたり而して君

は其の方向を轉せずして其の目的を達するを得たるは彼の彼たる所以にして吾人は深く此點に就て看過すべからず。

三十

### 森洋行前後

森厥然留學に決し十四五年にして志を立つる者固より大才早熟の人の常識なりと雖も氏の如き幾人かある此時藩内の輿論も益々改進に趣き町田民部(久成)五代才助(友厚)等海外留學生派遣の議提出す然るに藩主直ちに之を許可し大目付新納刑部五代才助及金之丞都合三名は歐劾視察として全行せり其當時海外航行は幕府の禁する所なるを以て變名して御用有之南海群島に使はずとの名義にて派遣せられたり。

一行は元治六年三月廿二日金之丞年十八歳等は薩劾申木野の近海羽嶋より英艦に乘し直ちに抜鋪全月廿六日香港に達す此に於て衣服を更め十日間留まる四日五日船を乗り換へ香港を發しシンガポール、セイロン、ホンベイ、アテン等に寄り洋風の驚きべき一隅を視スエズ地狹汽車にて横ざりカイロ府を通してアレキサン

デウル市に出で地中海にて更らに船に乗りシアラタルに於て壯大なる砲臺を眺め五月廿八日英國サウサンプトンに着き此處より汽車にて倫敦に向ふや益々不思議なる光景を目撃するを得たり而して蘇人の商人にて先年薩劾に親しきガールバノ手代にてキームなる者船中にて一切の事を斡旋を受け英國公使高輪の東漸寺に在りて其書記生たるオリファントなる者は我國の浪士の爲めに傷を蒙りて歸國せしものなるが昔學生の倫敦に着するやオリファント及び英國下院のガールバノ議員等へ面會する事を得たり亦たオリファントの厚意を以て倫敦大學の教授に面會し直接に學を受るに至れり而して留學生初めは共に一家を借りて住居し僕婢を使役し爲めに莫大の費を要したるを以て遂に分散し金之丞等は教授某の家に移寓したり其修むる所歴史物理化學等の普通學を研究す金之丞は殊に數學に長し二十一年の學業にて球面三角等を學びしと云ふ算術の加減等より學びし者には實に驚くべき進歩と云はざる可らず。

見る可し彼れは思慮早熟なる少年の身を以て否な僅に三ヶ年の遊學にして其得たる所の學業果して何幾なるや實に大ならずとせん殊に西洋の實情に至りても

他留學生の企て及ざる者なるは彼れの穎敏なる卓識を備ひ鋭腕を振ふて苦學せる活用的にして興味ある者なりき是れ即ち氏の觀察の其宜しきを得しや疑ふ可らず夫れ彼れは歸朝するや頗る尊重せらるゝに至る宜なり彼れは白面の少年を以て好地位を附與せらる是れ廿三歳の時外國權判事に榮擧全時に亦た山内中納言豊信の總裁の下に秋月種樹福岡孝悌大木喬任鮫嶋古信神田孝平等と共に議事取調員兼學校取調へに従事翌年一月軍務官判事となり如上の三官を兼勤せり后議事取調所を廢して制度寮を置きしにより以上の三官を免せられ制度寮副總裁の心得となる幾日ならずして制度寮廢せられ制度調査所立つ引續き取調員及び判事として其職に精勵せしが豪放不羈なる氣象直言憚らざる性質を有せし君は保守的の議論に衝突し忽然官を去て郷間に歸り學校を設け子弟を薰陶せり實に彼れは鮫嶋秋月福嶋大木等の先輩と全位置に推され名譽なる制度寮副總裁たる椅子を擬せらるゝも大頭腦大人物たる瞭然として暗夜に火を見るか如し而して彼亦た召されて米國少辨務使の任を帯ぶるや從五位に叙せられたり彼れは此時より外交官たり教育家たる手腕を振ひ精實以て身を犠牲に供したる猶は余の認

後 最 と 物 人

むる所なる而已ならず吾人も亦た丁知するならん。

帶刀廢止と其主唱者

如斯銳敏にして卓見を有する君は我國の寶劍として洋夷恐れ漢人戰慄する武士の魂として瞬時だも放さる所の刀劍をして廢止せんとし忽然廢刀の論を唱導す是れ固より賛成する者なし然れども君は豪放なる氣象を以て飽く迄是れが實行を期せんと欲し滿腔の熱情を呈し賛成すべきを論ず然りと雖も封建の制度尙純然として亡しにあらす各藩主は彼れの無鐵砲なる論鋒を聞き意氣勃然として發揮し其不可なる事を絶叫す幕府斃れて維新政府成と雖も武勇殺伐の氣風は四圍に喧傳し大和男子の耻辱たり刀は君主の神聖なる次きて最も神聖なる者たり武士たる者生よりも重く身よりも貴となし愛腰するならずや然るを廢刀論の如きは之れ實に不法なる言無禮なる辭たりと大に憤り藩士又壯て激怒し宜しく彼れを刺殺すべしと喧々囂々たり然りと雖も彼れ先達の明なる實に鬼神の如きか明治四年八月脱刀勝手たる可しとの令出て又た九年三月廢刀令出つ是れ全く彼

森 有 禮

の發言に由來する者にして彼の先見に長ずる卓識ある者他に求むるを得ざらん而して米に在勤せし有禮氏は四年の初めより六年の夏歸朝せしか凡そ三ヶ年の日月を占む五年四月中辨務使となり全十月代理公使に任せられたり此當時は我國が外交頗る幼稚にして米と交際もなく爲めに六年二月我國合衆國と郵便交換の道を開かんとして我國政府に議起り森下命せられて協議調印せし位なりき

森と李伯

明治八年に華嶋の事起り我朝に於ては黒田清隆井上馨の二氏を以て韓國廷に追り使節として罪を問はしむ全時に森をして清國特命全權公使となし派遣の任を負ひ清國北京に至る漸く年三十に垂なんとする青年の身を以て能く斯の大任を帯び東洋の豪傑滿清の柱石たる李鴻章と會見をなし東西歴史政体教育外交財制風土人情等に於ける問答滔々數百言彼れの豪放なる英邁卓見を以て能く李翁の間に答へ清國をして抑壓し蹂躪せんとする意氣李をして心膽を寒からしむるに至らしめたるは實に李の深く彼の人物たるを認識するを得たるべし議論の

進むに従ひ益々天性の英邁を振つて李と論戦す彼は自重自信の飽く迄高き迅雷の如き言を以て激烈なる攻撃を試み談判の本題に入るや短刀直入疾風の勢ひを以てさすが老練なる李も辨論の勝つ能ざるを悟り除々に論鋒をして問題外に逸出せんとするや彼は却て是を觀破し李を吐嗟の間に論談の變せし事を告げ或は嘲弄するの感なき能はせ余青年なりと雖も閣下は何故に欺罔し籠絡せんとするや假令余をして他に語を轉せしめんを欲するも得へからず余は帝國の大任を帯び來清せり然るに余を籠絡し曖昧に事を處せんとなす其だ不可なりと優々たる卓見と才能とを以て論難するや李は青年の彼れの俊才なるに驚き其銳敏なる奇語益々容易に當る可らざるを知らしむるに至れりと彼の激語以て李の心魂に徹し談判無事に結を告げ意氣揚々として歸朝せり實に彼の英雄豪邁なるを證するに足る可し

君は如斯俊才を有し能く國家の重任を全くするを得たる固より故なしとせん既に家庭の嚴格なる先輩の教化峻嚴なる師の薰陶其宜しきを得しに外ならずと雖も亦た君の卓識なるに依らざる可らず君は我國の教育制度文物西洋におどるを

深く慨し現時の状態を視察するに本邦人は元來小成に安じ大事に當るの勇なし其弊甚だ多しとなし教育主義を唱導し革進せんとするの志を起せし所以の者は是れ皆な海外を遊歴し諸國の實況を見虚心平氣一頭兩斷歐米人と我邦人とを比較し觀察せば我の彼に及ばざる甚だ遠し斯の如き臣民を以て競争場裡に立ち世界に並立せんと欲するも或は彼の壓抑する所となるを恐れ我か國家の大事一日も忘るゝ事能はず教育をして根本より改進せざる可らず外人をして蠻夷と侮どり文明の潮流に乗せし看過するは恐らくは國家を危殆に置く者なり今や我國にして此の文明の空氣を吸収し注入するにあらずんば後日に至り悔るも亦た其功なかる可し余好んで自國の暗愚を云ふ者にあらず余の認むる處他連邦に對し外交に貿易に教育に財政に一として彼れに降らん事を欲する者なり殊に我國は皇統連續として他より凌辱を受けし事なし況んや他に比類なき大和魂を有し將來益々武を張り威を揚げ以て世界の競争に勝つ快ならずや然りと雖も余は西洋心醉せし故を以て彼を學ぶべしと云ふにあらず固より彼の強ち善美なる者而已にあらず故に其善を取り短を捨て撰擇其宜しきを得可し

教育家としての森

學校平常の談話に於ても彼れ教育主義の骨子として愛國勤勉活潑等の元素にありとなし又た歴史上より國脈を彰明し日本國民の美德たる忠孝彝倫の道を遵び親愛の情に厚き事等を説明し生徒の腦裡に印銘せしめ嚴肅なる大祭の祝賀式を舉げ君主の尊意を表し能く生徒を薫陶すべき事を述たり其言に曰く凡そ教育は學問教育の職を奉ずる者の志操の淺薄なる者は職崗たるの資格なき者なり斯る無資格の職員を以て教育の大任を負しむ可らずとなし正を上げ不正を退ぞけ任免致陟大改良を加へ新人物を校長若くは教師に推舉し良教師良人物を得る事に苦心し國役を務め分に應じて其宜しきを得るに力めざる可からずと痛論しぬ

最終の森

時は惟れ明治二十二年二月十一日是れ果して如何なる日ぞや實に千歳の一遇我が憲法發布の大典を擧られし日なり賤が草刈る田夫學童も都府の貴顯と擧つて



尊影の英顔萬歳を三呼し其立憲式の大典を我が父兄に語り喜びぬ而して吾人は  
 意外にも此大祭祝日に於て吾人の尊重せる豪傑を失ひぬ。  
 森は此朝祝日に参列するの用意既に整へ馬車門外に立てり然るに偶々謁者あり  
 刺を通す西野文太郎と云ふ即ち大臣を刺殺せんと謀る者あり願くは親しく拜眉  
 を得て詳細を陳せんと夫人頗る之を愛ふ然るに君は左右を顧みて笑つて曰く事  
 の先に聞ゆる成るの例なし何んぞ驚くに足らんや揚々として自ら事に乗せんと  
 出で、客室の側を過ぐ文太郎一瞥曰く閣下大臣なるかと言未だ終らず直ちに立  
 ち君に近き魚刀を袴藏より揮ひ左の胸を押さひ右側を刺す侍史驚愕して曰く  
 賊と君は問へ相争ひ遂に倒る時に馳せて至る者あり文太郎の放たざるを見て倉  
 皇携ふ所の杖刀を抜き一撃の下に之を殺す君の傷頗る重し殆んど事物を辨せ  
 ざる有様直ちに名醫國手を呼び介抱施術盡さる然るに 畏くも両膝下開し召さ  
 れ侍醫侍従を見舞に使はし玉へ且つ御肴料を賜ふ然ども藥石効なく翌終に至り  
 て長逝す齡四十三なりき。  
 聖天恭なくも宸襟を痛せ玉へ侍従子爵富小路敬直を遣はし玉へ后太皇陛下宮亮

林直庸氏を皇后陛下よりは侯爵中山孝磨を吊問使として差遣し玉ひ左の勅宣を  
 賜はれたり。  
 他年職を外交に奉じ尋て内閣の樞機に参し教育大任に當り精を厲し職を盡す  
 茲に溢亡を聞く曷ぞ追悼に堪へん仍て正二位を賜はり併せて金幣五千圓を賜  
 ふ。  
 而して君は兇賊の爲め國事に斃ると雖も而も其榮や亦た大なりと云ふべし如斯  
 して子は其事業の半途にして可惜迷信の徒謬見の輩の犠牲に近きぬ乞ふ吾人を  
 して其死因を討究せしめんか是れが直接の因は先に伊勢初廟に参詣せし時不敬  
 の舉動ありと傳説したるに由るものなりと而して其不敬舉動は果して如何なる  
 者なりや二三新聞雜誌及び君の政敵を抱ける輩の流言報導を違ふせしに依り世  
 人をして五里霧中に彷徨せしめ或は厭の儘神聖なる階堂に昇りしと云へ或は耶  
 蘇教の徒弟を殊更に大廟に加へしと爲し或は神秘嚴禁の被障を越へたりと言  
 ふなど奇説百出益々世人に疑惑を懐かしめたり然れども吾人は斷ず深く皇室を  
 尊び國體を重じ愛國忠誠の志其心に離れず國臣をして教育主義に任せしめんと

せり君が皇室を侮蔑し國躰を輕視する如き行爲あり誇るべからざるを信ず。  
 而して明治十八年伊藤内閣成るや改進の氣風愈々其極端近げり當時井上伯は其  
 重任たる條約改正を成就せんとせば先づ我が國をして歐米の風情習慣に任せし  
 め以て彼等をして我等に同情を懐かしめんと專心洋風の輸入に心を盡したる然  
 れども彼等の此に至りたる所以の者皆な當時天下一般氣風益々改進に趣くに連  
 れられしに依る可しと雖も亦た森等の行爲が世上感化影響せし所尠少にあらざ  
 るを知るべし而して彼の森有禮なる者は苟も身一國の大臣となり教化の事を主  
 とる固より顧みる所なかる可らず此等は疑もなく國粹論を奉ずる愚蒙腐敗せる  
 保守家の感情なりき。  
 森の死因實に如斯約言すれば直接の原因は大廟の事なりと雖も其實は維新以來  
 君が餘りに革進の意堅たく爲めに禍害せらる者なりと又或は君の死を以て政治  
 的意味ある者なし彼れは伊藤内閣に雄腕を揮ひ爲めに或一種の人々の嫉妬忌諱  
 の念を抱き以て此に至りたる者なりと爲す吾人は容易に之を信ざる能はざるな  
 り。

西郷南洲

嗚呼人生誰れか死なからん死亦た惜むに足らず願くは此の高遠の魂魄永く教育  
 の精神となり以て能く今日の教育界に對し掃刷するあらば地下に於ける彼れ又  
 眞に冥目する所あらん。

天性豪邁淵達にして頗る果斷に富む容貌魁偉炯々たる眼光は以て一見人を射る  
 か如く凡備ならざるを想知する者は誰れとかなす是れ西郷隆盛なり君は薩摩の  
 藩士にして通稱を吉之助と云へ南洲と號す幼時より武道を嗜み和漢の書籍に著  
 眼して其興廢治亂の概略を追想するを得たり然れども世の學者等は悉く華美の  
 風を好み文弱に流るゝに係らず君は磊落不羈にして區々の小事に抱泥せず殆ん  
 ど一個の無慚漢たるに異ならず而して已れが心に於て決定したる事は假令他人  
 の非難攻撃あるも亦た如何なる艱苦と雖も不撓不屈遂行するの氣象を有せる人  
 物なり。

南洲と徳川幕府

彼は天下の英雄豪傑と相往来して幕府の専横天室の衰微に傾くを憂慮し君臣の大義名分を説き一身の艱難を顧みづして狂るす者の如し君偶々京師にあるや清水寺の僧月照と肺肝を吐露し相往来して共に義舉を企て生死を俱にせんと誓ひたり月照は身を釋門に置くと雖も慷慨の義氣深く平素近衛公の寵愛を受け樞機に參與せし者なり而して安政五年の秋朝廷は幕府を責問し且つ水戸齋昭に幕府を輔佐すべきの勅書を下さんとするや近衛公は豫め之を水戸に報せんと欲し此事を月照に托す月照隆盛を訪ひ此書を奉して水戸に赴き任を全せん事を謀る君は事の成らざるを知り辭す月照強請す君之を諒し水戸に至る事果して成らず登して更に京師に入り書を月照に返す伊知地正治海江田武次及び月照等と共に東山に會議し幕府の専横無法なる極に達せり宜しく檄を宇内の諸侯に飛し斷然幕府の義兵を擧げんと或は太政奉還せしめ夷敵を掃攘せん事を建白し幕府之れを納るればよし若し然らざれば大義名分を表白し以て正々堂々の陣を張らんと或

人 物 と 最 後

は曰く幕府の頑愚なる言論を要せん斷然義旗を標榜し成敗を天に任せて以て一舉に討幕せんと激論紛々決せずして遂に散す。

南洲と月照

西 郷 南 洲

是れより先き西郷伊知地月照等幕府の注目する所となりしと雖も薩藩の武威に恐れ容易に之を捕へんとする意なきも月照獨り捕へんとし搜索最も嚴重なるより西郷伊知地相圖り南都に隠匿せしめんと欲し月照をして遂に辛ふして京師を去らしめ路を海上に取り密に大坂より抜鎚せんとするや幕府追捕益々迫る然れども船の進航疾かりし爲め幸に脱れて馬關に着し白石正一郎の家に潜伏せしめ地を撰ばんと欲し武次月照を従ひ筑前の博多に至り平野國臣に托す月照は平野と共に西郷を高麗橋畔の自邸に訪ふ酒肴の間慷慨激論せり是れ實に安政五年十一月八日なり幕府追捕益々嚴にして最早潜匿に愈々危きに至る十六日西郷夜半突然旅装して月照の居を訪ふ西郷の顔色常に異なり眼光射るか如し月照早く其意を察す南洲の曰く月照をして難を日州に避けしむ可しと月照の曰く嗚呼彼地

は吾が死所なり、余幕府の手に罹る甚だ忌む、吾が生命旦夕に迫れり、吾が頭肯は君の一撃の下に托するの勝れるに如かずとなす、南州慷慨悲憤の涙禁むる能はず、遂に投海の約をなす時に、發程宜く速かにすべしと、平野の從僕重助を呼び、海岸に到る是れは一隻の端舟既にあり、是れ蓋し南洲の先に設備せる所なり、四人急に之に乗じ、棹を投じて海中に出づ、寒月皎々として、波濤を照し、微風徐に來て、海面宛然、白布を張りしが如く、南洲齋す處の酒肴を出し、相圓坐して之を飲む、酒酣なる時、詩歌吟聲興美を極む、時に南洲起て、船表に至る、月照亦た尾行す、俄然水聲あり、平野重助の兩人、大に驚き、船表に至れば、二人既に海中に投身せり、兩人叫んで、狼狽す、直ちに屍を求めんとして、水中に入り、遂に二人の屍を抱きて、水上に浮ぶ、之を檢すれば、共に一線の氣息なし、唯だ南洲の胸部温を感ず、衣を替へ、水を吐かしめ、船を海濱に、鐵し、火を焚き、温を求め、百法療治す、既にして、南州蘇生す、此に於て、名を菊池源吾と改む、后大嶋に行く事三回、此に於て改稱して、自から大嶋三右衛門と號しぬ。

南洲の最後

西郷南洲は全郷の木戸、大久保等も政見を同ふし、交密なりしも、一朝征韓論の起るや、忽然意見衝突し、朝議紛々として、底止する處なし、彼れは益々木戸利通等と相反目敵視するに至る、是於て彼は憤然意を決し、職を辭し、地を離つて、故山に歸る、然れども人傑南洲其職にあるや、有爲の志士心服せし者多く、西郷の歸國を聽きし、相野篠原、村田、別府の輩も亦た辭表を提出して去る、南洲鹿兒嶋に私學校を設け、服心の意志を師となし、生徒を集むる事頻なり、是れを聽きし、各級の士は積々として、入學する者益々加はるに至る、此に於て天下の人は是れを目して、私學校黨と稱し、我國無雙の強黨と目せられたり、彼れ南洲は生徒に讀書を授くるの外、壯士を率ひて山野の險を跋渉して、身軀強壯を圖り、腕力を養成せんが爲めには、劍法を授け、常に壯士輩を戒めて曰く、大丈夫將に國難に殉決して死を惜む可らずと、七書精讀、遺言等を説授する外、愛犬を率ひて、山野に銃獵し、鐵を把て、田を耕耘し、水を汲んで、園に灌ぎ、朋友を集めて、碁を圍み、温泉は身を投ずる等、其壯苑も仙を學ぶ者の如し、閑散に日を費やし、實に意を功名に絶つ者の如し、而して時至れるにわらずと雖も、麾下の猛將西郷に告げて、暴舉を取げんと、遂に其言を入れ、明治十年二月十三日、名を刺客に託

し、自ら政府に詰問せんと學校黨を糾合し、鹿兒嶋に兵を起し、南洲是れが巨魁たり  
 曉傑勇猛の桐郎、村田、篠原、別府の輩は是れが將校たり、神補たり、慄、忼、決、死、能、く、戦、ふ  
 の私學校黨總兵二萬餘人、正々堂々として鹿兒嶋を出で、途に熊本城を圍み、直に上  
 國を突かんと意氣峻嚴、向ふ所敵なきか如し、偶々事の叡聞に達するあり、天皇宸  
 襟を惱まされ、征討の詔を發し、有栖川宮を以て征討大總督に命せらる、彼れ等の麾  
 下に屬する精兵總して二萬餘人、先づ熊本城を襲撃す、時の隊長、谷干城等、必死以て  
 之に防戦す、爲めに熊本城、抜く能はざるを知り、更らに路を轉じて日向に向へぬ、彼れ  
 等、其初より戦ふては勝ち、勝ちては進み、官兵の死傷算なきの戦況は、流石に西郷以  
 下、主領の指揮、完きを得たるも、意思の強硬一致、以て事に應りしに因らずんば、あ  
 らず、戦後約八ヶ月に及ぶ、今や多く兵を損する所となり、衆寡敵する能はざるを知り、  
 再び鹿兒嶋に引返し、事を擧ぐる所あらんとせしか、官軍、日毎に要路に侵入し、彼れ  
 等の歸路を止塞す、遂に九月二十四日、城山に倒る、吾人は西南の戦として如何に激  
 烈に如何に目を惹くかは、未だ吾人の腦裡を脱却せざるべきなり、西郷、南洲、彼れ實  
 に日本唯一の剛傑として、感服せし人物なり、知らず或る感動に激發して、此かる風

因を起し、此かる結果を招きしに至りしは、余輩の實に惜しむべく遺憾とする所也  
 彼れ、英雄たる南洲の最後や、悲むべし、然れども、當時の事情、或は止むを得ざりしな  
 るべし、一時反賊の臭名を受けしと雖も、皇恩や深宏にして、永遠なり、廿二年、特典を  
 以て、賊名を除かれぬ、而して、廿年後の今日に於ける吾人の感想や、果して如何一人  
 とし、七、彼れを惜しまざる者、あらんや、思へば、彼れは實に稀有の人物たることを知  
 るべし、今や彼れが英魂は、東臺に光を放ち、恰かも世に在るが如し、彼れの名は實に  
 此の銅像と共に、万古不朽たるべきを知らば、地下の南洲、宜しく嘆いて可也。

田 中 平 八

田中平八、彼れは實に實業界の侖傑たり、其商機に敏にして、光見、克く、誤らざる、神の  
 如し、以て其尋常人たらざるを知るべきや、而して資性剛毅、膽略頗る、任侠に富む、推  
 して彼れが如何に社會の推重受けしかを知るべきなり。  
 君は信州飯田の人、幼少時代より英才衆に秀づ、長して後、大志を抱き、江戸に上る、蓋  
 し彼れが山間僻地たる郷土は、彼れをして目的を達し、大志を遂げしむるの地たら

ざるべし郷黨一として情むなきを達察したればなり其初めて江戸に上るや當時  
 徳川幕府は衰頽し今や將さに威亡せんとするの秋に際し人心恟々たり時に米關  
 の諸文明國より開港の議切に軍艦船相併んで航向し續々内地に上陸するの勢を  
 呈しぬ彼れは此機失す可らずしとなし江戸を發して横濱に轉じ外人又續々とし  
 て役地に上陸し爲めに商業界に火氣を帶ふ商界旺盛たり君は英敏の才を揮ふて  
 外人と貿易を試む或時は彼れ等の人膽を塞からしめ利亦大に益す然れども交  
 商の失敗又屢々なりき彼れ機を圖り一攫千金以て失敗を復せんと毫も挫折せず  
 常に堅忍不拔の二字を以て時機を窺ふに於て敢てする所なかりし彼れが勞や  
 空しとせず福運益々來り買へば上り賣れば下るの勢ひ忽ち數年を経ずして巨利  
 を獲しぬ彼れは茲に至り始めて其地盤を固めり彼れが信用は日に月に重なり取  
 引又年に擴まる明治三年に至り遠國取引相場會社を設け自ら之れが頭取となり  
 次で替爲會社第二銀行等は皆な是れ彼れの斡旋する處なり而して亦た全八年東  
 京堀段町に商行會議所を開き米商會社を起し東京の商業界を奮起せしむ又た長  
 野縣爲替所を阪本町に開き第百十二國立銀行を創立して之れれが頭取となる然

るに世は益々外商頻繁に傾くに當り彼は剛毅膽略を以て常に任侠と稱られ特に  
 商機に當る鋭敏にして勤勉不撓の精神を以て會社の業務に奔走し孜々として惰  
 る事なく商業界に熱注せる功豈に尠少ならざる也

天下の糸平

彼れは實に確忍を守して以て事に當る偶々事の至難なるに會せば奮然として曰  
 く我は天下の糸平なり何ぞ斯かる事を遂ぐる能はざる事やあらんと勵聲一番再  
 び之に應じて果すにあらざれば止まらざりしなり其氣象や實に贊すべし世人舉  
 げて天下の糸平と呼ぶ宜なり天下の二字を冠する又榮なり以て彼れが人物を知  
 るべし

糸平の最後

田中平八彼れは眞に斯業界の英傑として世の推重を受けり彼れは山間の一僻村  
 に生れ艱難を排して以て志を遂ぐ又非凡の才あるにあらずんば何を以て之を得

んや、然れども人必らずや命數あり彼れは十七年六月七日病魔に冒され終に東京坂本町の自宅に没す年五十有四惜しむべきなり而して彼れは偉業を奏して後者の龜鑑となり提督となれり其功や又以て空しからずとなす今や彼が名聲は伊藤侯の筆に成り墨堤に築てる石標と共に朽ちざるなり嗚呼吾人糸平の最後を以て最後と爲さんと欲する也誰れか又疑はんや。

五十

木 戸 松 菊

木戸孝允本姓和田名は小五郎諱を孝允松菊と稱す幼にして桂に養はれたるを以て桂小五郎と云ふ、舊山口藩主に仕へし士族なり君は幼時驕悍不羈惡戯是れ勉む母是を憂慮し警むと雖も聽かず母死に臨んで君に謂て曰く汝の惡戯止まづんば死すとも瞑する事能はずと此に於て忽ち先非を悔悟し學事を修むるの志を起し同藩なる吉田松陰に事ふ後ち改めて木戸準一郎と稱す、江戸に上て齋藤爾九郎に就て擊劍を學び、江川太郎左衛門及び勝麟太郎の門に出入し得る所あり君の名有志の間に知らる、藩邸に有備館あり、講師となり國語、洋學、漢學及び劍法の諸科を

授け赤心以て之を務む幾多の良人物を養成せしや亦た知る可きのみ。

維 新 と 木 戸

舊往制復古し維新の大偉業緒に就かんとするや英雄俊傑雲の如く出てしと雖も赤心以て忠君を唱へ誠實以て國を愛するの士幾何かある此の多くの人中卓絶し維新の元勳として果た卓見家として其名高かりき君會て天下の形勢を豫知し私かに以爲らく今や列藩各々割據して其封土を領有し維新王政の名ありと雖も其實なく幕制倒ると雖も姦徒隨を接して起り天下を爭奪するなきを虞る此時に當り最も急務中の急務として各藩の封土を収めざる可らずと爲し藩侯に訴ふ侯之を可とし君をして書策せしむ君聖烈に陪して東京に出づるや此事を甲東に歸る時に薩藩石高十分の一を獻せんとするの意ありと、大久保是を聽て手を拍て可と稱す、君次て京師に歸るや土肥二藩も封土奉還するの議あり、其他大小三百の諸侯も亦た奉還するに至れり、此に於てや府藩縣の制を設け藩知事となす、后ち君は西郷大久保と共に高知に至り書策する處あり、三藩の兵十七隊を召して親兵とな

人 物 と 最 後

す、各藩知事の職を廢し此に於て郡縣の制度全く成る此に於て參議西郷隆盛、副嶋種直、江藤新平、後藤象二郎、板垣退助等皆な征韓論を主張す君は是を不可となす、南洲等其議の合はざるを憤り、驟然辭職して故山に歸る、朝野人心恟々たり、君は利通、岩倉等と相謀り、國事を經營す、臺灣征伐の議起り亦た江藤等佐賀に亂を起し、國家益々播擻するの時、君偶々病廢の床にあり然りと雖も其の赤誠忠君の念毫も離れず、忠臣は身を潔ふして以て身を求めずと君は身を潔ふするにあらざるを求むるにあらざるをなし、官を辭して病を養ふ事を勉む、君愈々官を去つて山口歸るや、時論躁急にして且令夕改多く依る所に困す、乙亥臺灣支那の談判共に局を結ぶの時、君は俗論に隨はず意見漸く合はざるに井上は英臣の調和を企て利通、伊藤、板垣、孝允の諸子の大坂に會す是れを大坂會議となす、議將來施政に及ぶ議一決し、君再び參議に列す、尋で地方官會議長となり、政務を掌す、后ち參議を辭し内閣顧問となる、嗚呼君の如きは萬死を冒して赤誠若實、忠君愛國の熱情を揮ふて誰れか其精心を敬慕せざらん、君は温厚闊達、長軀豐頬、人接して柔、其容宛も婦女の如し然れども其赤誠を揮ふて天下の大勢を論するに至ては忽ちにして張議となり、蘇秦となる、吾

人は君の卓見と勤功の甚た偉大なる推してトせん。

名譽の最終

木 戸 松 菊

木戸松菊は最も名譽の最後を遂げたり、彼は其始め蹕を扈して西京に至る、偶々西郷桐野等政府に問ふ所ありと稱し、將に大兵を帥いて東京に至らんとす、君は即ち切に此旨を奏して、策を西京に駐め、征伐の詔を發せしめ、以て自ら之れが任に當らんことを請ふ、時に甲東東京至る君は利通と大に激論す、爲めに病忽ち起る、長くも天皇は其旅館に臨御して親しく之を慰問せらる、公是れを見て、恐れ大となし、身を轉して褥を降らんとす、天皇是れを止めしめ、易ぞ夫れ、光榮なる如斯は實に公の外見る能はざるなり、彼か功や空しとせず、其月二十五日勳一等に叙せられ、旭日大綬章を賜はる、二十六日彼れは、大呼して曰く、吾が最愛なる西郷何んぞ休めて、聖旨を安せしめざるぞ、一番して、后ち溢然途に薨す、歳四十四、事天聰に達し、哀悼の辭を賜はり、次で正二位を贈らる、彼れが葬地たる西京靈山や、實に彼が香名と美德を以て充たさる、彰すへきは松菊の最終也。



山岡鐵舟

人 物 と 最 後

學者として濃筆家として、劍法家として、名を后世に遺し稀有の人物たる者誰れとかなす、言はずして、吾人は山岡鐵舟なる事を知らん。君は名を高歩、字は曠野、鐵太郎と稱す、居士九歳にして精神を鍛錬するの必要を認め、或時父に就て問ふ、父君の曰く、我家の祖先高寛公は、劍法を小野治郎右衛門、小太刀半七の二人に就て學びたり、禪學の淵奥を極め、以て東照公に仕へ奉り、以て戰功を著はす事、屢々なりき而して、其旅は常に、吹毛不會動の五文字を書したり、汝が心を鍊らんとせば、劍道を學び禪學を修むるより他策なしと、居士是れを聞いて、忽然として、劍法を學ぶの緒に就くや、初め劍法達人の久須美閑道齋に就き、眞影流を學び、后更めて井上清虎に従ふて、北辰一刀流を受く、君益々其眞意を甘味し、亦た淺利義明の門を叩き、師に仰ぎ、一刀流を究めたり而して、其奥義に達せんと欲し、熱心と精實とを以て、不撓不屈、日夜苦練せられたりき、亦た居士十三才の時感する所あり、慨然として、以て爲らく君に忠を盡し、死を視る事歸するが如き者皆な思想の鞏固に

山 岡 鐵 舟

して、確然其志を變せず、主に忠を盡して、以て后世名を垂れ、赫々として朽らざる者、至誠至仁に基へせざる可らず、如何なる寡言善行も、至誠至仁にあらざれば、以て表面の飾りとなり、終らん會て父の言の如く、禪を修むるに如くは、なして鐵舟此に於て始めて、願翁和尚を訪問し、師となして、苦學研究する事、十年を歴たり、然りと雖も、願翁猶未だ其奥義を許可せず、然れども、居士少しも倦怠の色を現わさず、志愈々堅かりき、又豆州龍澤寺星定禪師に參す、寺は務の三嶋驛の西一里半にあり、鐵舟暇日毎に必ら老拂曉、江戸を發し、騎馬に鞭て、函根の嶺を過ぎ、深夜四更、龍澤寺に至ると云ふ、着すれば、則ち先づ星定に參じて、而后乃ち飯を喫す、君湯温かならざる時は、則ち水を飲んで、食を降し、如何昌塞と雖も、未だ會て難色を顯はさず、平然たりしと云ふ、次で、滴水、洪川、獨園の諸老等へ、歴參し、終に滴水の印可を受くるに至れり。

鐵舟と劍法

而して、或日滴水に參じ、語次偶々劍法に及ぶ、滴水即ち兩刀の鋒を交ゆ、避くるを須ひず、好手却て火裏の蓮に同じ、宛然自ら、衝天の氣ありの句を擧して、之れに授く、居

士之れを紳々書し居常拈提する事三年一旦豁然として省悟する所あり則ち馳せ  
往て淺利に見ゆ請ふて共に技術を開す技法神妙實に其技の長せし昔日の比に非  
ず淺利乃ち木刀を拋棄し容を改めて告げて曰く子已に至れりと以て吾が秘奥を  
傳ふべしと遂に一刀齋の謂ゆる無想劍の極致を授く居士既に之を傳授し是れよ  
り益々厲精擴充を移め研究以て古來未發の蘊奥を發明し竟に無刀流の一派を開  
き以て君の徒弟を薰陶教授せり獨園禪師の曰く鐵舟居士の劍法に於ける其淵源  
する所深く且つ遠矣而して居士が無刀流の一派を開きしを開きし四圍の劍客  
つて其の技を授けられんとなし來る者多かりき。

能筆と禪學

居士の性たる幼少より精神の鍛鍊に志し禪學に劍法に一意専心熱情を以て不撓  
不屈艱苦を嘗めて以て其蘊奥を討究せし氣象の確立せる普通の能くすべき所に  
あらず君が后に至り能筆として世人に尊重せらるに至る又宜ならずや余輩の之  
れを認識するのみならず吾人も亦た首肯する敢て吝ならずる也彼れ亦禪學に長  
じたり彼れは一の新坐禪法を發明し一新派を啓きぬ以て君の性行を明かにし得  
べし。

鐵舟の最後

劍法家として禪學者として、漢筆家として、名聲宇内に轟々として尊重せられたる、  
彼れは王政復古以來千難を排して萬艱に堪へ國事に盡されたる功績果して幾何  
かある特に彼れは徳川慶喜公の藩屏として善く難に處し軀を棄て、以て、忠臣の  
義を守り氣象活潑の勇士たり而して人生必ず命數あり如何なる人傑と雖も一朝  
病軍の襲撃に遇へば亦た如何とする事能はず彼れ遂に病の軍に打ち勝つ能はず  
して遂に明治廿一年七月十九日を以て瞑す嗚呼誰れか彼れの死を惜まざる者あ  
らんや。

鐵舟と其絶筆

左は鐵舟居士が勝安房に送りし最後の筆なり何ぞ夫れ豪宕なる此の一事を以て

公の精神を測るに足る。

二堅何因煩此禮

犬飲暴食害不空

轉苦爲樂觀自在

生死任天臥壘中

御一笑奉願候

五月十五日

山岡鐵太郎

勝海舟先生座下

人 物 と 最 後

俊才の志士として稱揚せられたる陸奥宗光は出所を和歌山縣とす彼は舊和歌山藩の門閥家として果た人望家として其名高く幼時より賢明を以て呼ばる長ずるに従がひ益々辨才に長ず時宛も徳川幕府變れて政權全く失するに當り諸藩勤王の志士慨屈するに及んで藩論紛々として二派に岐れ幕府の意見を倒さんとして攘夷論を主張する者あり亦た勤王正義の志を喚起せんと欲し佐幕の論を主唱するあり殺氣紛然として人心亦た恟々たり彼れは此の時に當り 天皇の儀式微々

陸 奥 宗 光

陸 奥 宗 光

として振はざるを痛激し幕府の専横行の所爲を憤り勤王倒幕論を主唱して世論を一變せんと欲し奮然身を忠君愛國の犠牲に供せんと欲し閔老と激論屢々なり然れども議合はず意見衝突せり彼は忽ち藩を脱して身山口に在り時に山口には木戸井上山縣伊藤高杉の同志と大に爲すわらんとし協力同心策を回らし東西に馳驅して遂に王政復古の大偉業を奏しぬ後ち兵庫縣令となり能く其縣治を全ふし官民の歡迎を受くる切なりしは吾人の當時を追想して能く知る所なり幾多ならずして議官の一を占む明治十年西郷兵を擧ぐるや宗光亦た其謀を一にせりどの疑を以て墓なくも獄中の人となり

出獄後の宗光

彼れは獄中にある事数年常に國事に託して措かず時に種々の著書を爲し以て獄中自ら快とせり出獄後彼れは歐米漫遊を試み以て各文明國風土文物を熟察する所あらんと忽ち其國に赴く是れぞ君が新智識を加へたるの因由にして亦實に君をして將來の政海に雄飛し勳播せしめたる原動力と云はざる可らず後ち彼れは

幾ならずして元老院に奉職し樞要の椅子を占む明治十年西郷南洲の西南に兵を  
出すや彼れも亦た此舉に與する故を以て遂に法網に罹り獄屋に呻吟するの非運  
に際會せり吾人は實に彼れの俊才卓識の志を懐き獄に降るを惜む眞に彼は國事  
の爲め身を殺して以て仁を爲す者なりと評して可也。

宗光と日清戰役

我國一度ひ清國と戰を交ゆるや連戰連勝清國は李伯をして媾和を求む此時に當  
て其衝に應じたるものは總理大臣伊藤博文及び外相陸宗光即ち之れ也其初め  
朝鮮王妃殺害事件の起るや時の朝鮮公使大島圭助をして強硬主義を取らしめ以  
て日本の威武を示したるは彼れ宗光の政略たり續て馬關に於ける談判の如き伊  
藤總理の軟弱に引換へ彼れは絶對的強硬主義を以てし而して談判の緒を啓きぬ  
清國の使等之を見て日本は強硬主義を徹せんとす恐らくは媾和の途を求め得可  
からずとなし之を本國政府に電したりとは如何に彼れ外相としての宗光か硬談  
に出でしかを知るに足るべし若し一に伊藤總理のみを以て當らしめんか彼れは

平和の宰相たり八方美人主義を振り蒔く謂所才物のみ亂時の相たるの資格を欲  
く宜なり李伯は伊藤を哀弄せしも陸奥を恐るゝに至りしとは推して二者の主義  
性行を知るべし嗚呼陸奥の強硬は實に媾和の好果を得たり而して世界の歴史上  
に強國としての日本名譽を放つに至りしの大偉業は之れ全く宗光の功に出づる  
と云ふも敢て過言にあらざる也彼れが偉勳は實に此一事を以てせず歐米諸國と  
の條約改正は實に君が外務大臣としての時代にありし事を記慰せり幕末當時に  
於ける切齒痛憤堪ふ可く忍ぶべからざる夫の不均的條約を改めて對當となし始  
めて世界の文明國と其肩を同ふせしめたるは陸奥外相の當時あるを思へば如何  
に彼れが偉勳の宏大にして空前絶後の舉たるや吾人の賞賛し感謝せざる可  
らざる所以也。

宗光と最後

宗光は恰例の性を以て世人に尊重せられし才物なり彼れは眞に近世稀有の俊才  
者たり彼れは國事の爲めに身を獄中に投せり彼れは日清戰役の當時外務大臣た

るの重職にあり身以て外交の難事に處ず殊に是れが平和の局を結ぶに當りて大に敏腕を揮ひ能く其の機を失せを伊藤侯を保佐せり若し彼れなかりせば日清の局末如何に決せしや余輩は云はん外交の急に應じ變に處し以て短日月の間に結を告げたる真に宗光の手腕の然らしむる所ならん彼れは平和談判に苦心慘愴頭裡を悩したる結果精神に異状を生じ病の床に臥し病魔の毒は日毎に侵入し入り遂に明治卅年八月廿四日を以て取果なく彼世の人と化せり嗚呼惜むべき人才を失へり然れども彼れは二人の男子あり長を廣吉と云ふ次を潤吉と稱し長は現今外務の職にありて英腕を揮へり彼れは父に劣らざる俊才として尊信せらる次で弟の潤吉亦た學識秀で身を實業界に投じ國利を圖り兄弟共に身を邦國に獻替するの精神を有せり遠天地下にある故宗光亦た以て此の狀を察し能く嘆す可し而して故宗光の功績偉業と其芳名は千載に朽ちず歴史上に赫々として後世に傳はる又何ぞ快ならずとせんや

桐野利秋

桐野利秋彼れは眞に薩南健兒中の健兒たり資性剛毅果斷にして峻烈機鋒四に射りて逼接すべからざる飛將軍たり君の名は半二郎と稱し鹿兒嶋近郷の中村某の二男にして農家に生る幼時より武藝を好み山野を跋渉して以て竹木を斫り鑿劍を試み自ら快となし飽く迄腕力を養成し精神の鍛練之れ勉む剛益々剛にして文事を好まず衆童の群集を謀り自ら之れが指揮となり主として角觥擊劍の如き武技に耽り亦た或時は群童を集めて二隊となし兩隊別れて兵陣の狀を模擬し是れが隊長となり是れが闘争を爲さしめ東奔西走自ら指揮し雀躍措く能はず彼れは日々の遊戯行動武藝に關せざるなく身強健にして性質剛毅武勇の思想没々として其容に充つ亦た曾て爐邊に在て硝藥を弄するを愉となす傍人危惧し直ちに其不可なるを戒め之れを奪取せんとするも肯せざ曰く是れ硝藥は戰闘の要具なり苟も大軍の士卒を統率して以て絶大の偉勳を策せんと欲する者は必らずや其使用音響に慣れざる可らず請ふ姑く我が爲す所を觀よと忽ら一塊の硝藥を把て火中に投ず轟然爆聲屋内に霹靂震動す君是れを見て掌を拍て快絶愉絶と稱す其剛毅活潑なる概ね此の如し蓋し大人と雖も君の如き勇猛の士あらん況んや少年の

君に於てをや。

### 猛勇其實戰

彼れは益々長するに従ひ剛毅の性の猛勇の聽へ其名四面に響く戊辰の役を始めとし奥羽越の戦陣に従屬し軍監となりて屢々挑戦是れ勉む東軍の將士大に愕さる彼れの向ふ所敵なく一令の下敵の勢力を奪ふを得たり次て丁卯の冬關下に猛威を張りし新撰組の巨魁にて近藤勇に關殺せられたる伊藤武明の弟並に同盟の士數名をして伏水の藩邸に隠匿せしめ同地奉行所に集屯せし近藤勇及び會津藩兵を要撃せん事を謀りしも果さず翌戊辰の一月突然幕軍と戦端を開き鋒を交へて鳥羽の血戦と爲るや君は此時伏水出陣の隊長として有馬藤太及び武明の殘徒をして先鋒に進軍せしめ諸隊を指揮し連日連夜の奮戦我軍隊を鼓舞し縦横謀略を企て劍光閃々たる狀電光の如く屍を踏んで激戦し勇猛を顯はして奇功を擧げ屢々幕軍を擊退して番名天下に轟かし遂に偉大の軍功を立てぬ朝廷之れを嘉して正五位に叙し陸軍少將に擢進せり如此して榮譽を兩肩に荷ひし君が最後は如

人 物 と 最 後

何余輩の切に説かんと欲する所也。

### 利秋の末路

桐 野 利 秋

利秋は西郷南洲と交密なり常に相通して以て始終を一にす南洲は利秋の剛勇と智望とを愛し利秋は南洲の偉傑に深服せり彼れは眞に南洲の片肩となり篠原國幹と相應して以て南洲の肱股たり共に身は軍籍の人なりし偶々征韓論の起るや朝廷又喧々各々自説を主張して其歸する所を知る能はざりしが遂に南洲の意見は排せらるゝに至る之より後ち南洲憤然冠を棄てし野に下り郷里鹿嶋に歸る利秋等之を聞て樂まず遂に兵を擧げて朝に反す西南の役即ち是也彼等の率ひる精兵は能く官軍と戦ひ官軍又連戦連敗す然れども衆寡敵せず九月廿四日西郷を始め利秋等城山に戦死す此間日を閲する二百十六日月を踰ゆる八ヶ月能く戦端を續けしに至りたるを思へば如何に彼れが指揮の巧長せるかを推するに足るべきなり嗚呼英雄の末路も亦た悲むべし一時の衝突意見の積消は遂に相砲烟を交へ命は城山の露と化せしむ剩さへ賊名を受け官位は視奪さるゝに至りたるは遺城

なりと云ふべし。利秋の最後や實に悲むべく、其末路や真に憫むべし。然れども此一舉や舊來の兵制を革刷し國民の夢を覺破したる一大因由にして抑々今日の事あるは全く此事實に根據する者と云はざる可からず。見よ、役後兵備の刷新を余は思ふ。利秋の死は實に社會的也。國家的なり。一時の臭名眞に悲むべく、惡むべし。雖も將來及び現在の日本帝國に對する兵力に向つて幾多の利益を與へ國威を發起せしたるか、察せば彼れの死を悼ふに於て余輩又切なるものなり。

江 藤 新 平

天資豪邁頗る果斷の氣象に富むもの、是れを江藤新平の平常に見る。君は生地を佐賀となす、彼は三條實美と携へて王政復古を主唱し、藩を脱して同志を求む。彼れは遂に赤誠を果し、賞典藤百石を賜はる。是れ彼れが抑も世に立ち事に當るの始めとなす。后ち彼は中辨に任せられ、幾何ならせして文部省大輔に進み、次で明治五年司法卿となるや、専ら宇内の法制に着眼し、殊に我國法の不完全なるに慨嘆し、而して是れが法制たるや、徳川幕府の政策に依りて、作制せる者にして由來取つて以て

之を行ひし者、當時の政治に不適當なるのみならず、至を正義に反し、情理に背するを如何せん。是れを改正せんと欲す。今や封建の制度全く破れ、統一主義を行ふの時に當り、尤も急務中の急務たるべきもの、即ち刑法の發布にありとなし。明治三年明律及び日本舊來の刑法を參酌して始めて此刑法を制定せり。是れを名けて新律綱領となす。然れども此新綱領も亦た明律の模寫に過ぎざるを以て不完全を認め

改 定 律 例 と 司 法 卿

更らに進んで改定律例を作りたり、而して此の改定律例は恰んぞ新律綱領の弊害を除去せし者にして、頗る日本當時の現狀に適當し、人情に合ふものとなし。大に尊重せられたり。然れども當時の司法卿たる彼、新平は明治四年の頃始めて佛國六法の翻譯せる者を觀て、實に其の整然たるに驚き、日本民法制定の必要を感じ、頻りに政府に迫れり。又た佛國刑法の改定律例に比し、遂に完美なる事を知り、歐洲主義の刑法を設くるの急なるを説き、専ら法制改定に力を竭し、遂に今日の刑法を觀るに至る。如斯彼れは日本當時の法制を不可となし、茲に文明主義の法制を發布した

其功の偉大なるを知らん吾人の身命財産の安固なる彼れの方に依らずんばあ  
る可ら走次て彼れは翌六年同列なる板垣西郷副嶋等先に朝鮮に派遣せる使節に  
對し不敬の舉動ありとし問罪の師を起すべきを主張す是れ則ち征韓論の基因す  
る處たり時に岩倉右大臣は歐洲より歸朝し其事の是ならざるに朝議一決せしか  
ば彼れ憤激に堪へず終に病に托して冠を懸け以後東京にあつて密に故郷佐賀の  
壯士等を煽動して以て大に爲す所あらんとせり偶々佐賀の士族鍋嶋一之丞副嶋  
鎌助木原義四郎等を謀主となし征韓の軍資を募るを名とし豪家に侵入し金穀軍  
器を強奪すとの報を聞くや彼れは毅然として佐賀に走せ至る次て島義勇も陽に  
鎮撫と稱し佐賀に歸り彼は島と共謀して以て一篇の激文を草して遂に兵を擧げ  
時の政府に抵抗す此舉遂に彼をして悲むべく痛むべく憫むべき最後を見るに至  
る原由たり

新平と兒童

君の家は初め甚だ貧しくして夫妻の衣服も殆んど窮するに至る然かりと雖も常

に見に與ふるに最上の菓を以てせり人は是れを恠んで其の何の故かを問ふ新平の  
曰く子をして他を羨み自ら賤みて鄙吝の志を生じ人に長たるの氣を挫かしむ可  
しとの寸語誠に萬金の價ありと云ふ可し

新平の最後

彼れ新平は司法卿として樞要の職を奉し致々として當時の法制を制作し精勵日  
ならずして征韓の議論に衝突し遂に身を故郷の僻地に投し島義勇と意氣相照合  
し協力して舉兵を謀り明治七年遂に兵を佐賀に起し堂々たる壯士鼓を鳴して横  
行せり偶々此兇報報聞に達し直ちに利通に命す海軍少將伊藤祐磨野津鎮雄山田  
顯義等をして數萬の兵を托し是れが指揮將校となし明治七年二月十五日佐賀に  
向はしむ時に賊勢甚だ猛烈にして官軍當る可らず兩軍相對して戦ふと數回に及  
ぶ軍兵屢々敗ず賊勢此機失ふ可らずとして奮戦せり然れども遂に官軍の勝利に  
歸せり次て諸將議して主魁新平及び島義勇等捕られて遂に死刑に處せらるゝの  
悲運に會す然れども彼れらは眞に國家盛衰に熱情を注ぎ事此に出し者にして國



より惜む可き者にあらずと雖も然かも時の政府を顛覆して以て自己の意見を實行せんとするの心意に至りては亦た已む可らざるなり真に彼れらば國事に變る實に惜むべく悲む可き者なり彼れは死刑に臨んで左の一首を口吟せり。

大丈夫の涙は袖にしほりつゝ迷ふ心はたゞ國のため

國を思ふ人こそ知らぬ武士の心つくしの袖の泪は

以つて彼れの氣象確固不拔なるを知らん。

後藤象次郎

夫れ大權奉還を決行し王政回復の端を啓けるものは實に象次郎の力なり彼れは阪本龍馬の大權奉還説を薩長兵力黨の以外に於て平和的革命的の別幟を樹つるに當り首として其説に發し縱横活達の辯よく異を抵ち難を排して以て土佐の藩論を定め將軍の台座を動かし兩人の歩調軌を同ふして其情事も亦頗る趣きを同ふするに至る豈に偶然の意奇ならずや。

元來彼れの資賦たる剛膽にして亦た奇才あり先見の明に富み頗る世界の人目を

惹くに至る彼れは明治廿一年大同團結の主唱として名聲四國に揚り人の益信賴し専ら政黨の擴張を謀り時の政府を辨難攻撃し能く世界の風潮と相待つて政見を唱導するや民心愈々囑望して黨勢大に振ふ時しも改進自由の兩黨現はれ社界の各方面に對し其主義政見を演説に討論に種々の手段を以て横行し政黨擴張尤も強盛を極めぬ此時將さに内閣の更迭に會す忽ち擧げられて慶相となり閣員の倚子を占めし之れ盡し君が人才の結果たりとは云ひ在野に於ける君が勢力の強盛を折止して以て力を政府部内に注入せしめんとするの政略に由來せし者なりとは吾人の深く信する所にして豈何を乎疑はんや彼れは暫時内閣の人たりしが年に月に政海の動搖を加へ黨人相提して民野に催す國家益々多事ならんとする秋に遭ひしが計らざりき官紀振肅問題の起り今や君の頭上を陥撃せんとするに至れり此一事遂に伯をして再び民野の人たらしめぬ後ち政海を去つて遠く孤嶋の人となり恰かも世を忘れたるが如く一に花卉に逸して自から天の樂とせり。

多情家としての後藤

夫れ人として世に生るもの誰れか情無きものあらんや吾人は實に情の動物也情の爲めに動き情の爲めに止まる只情の發動と結果か吾人の價値を上下せしむるのみ

後藤象次郎は英雄豪傑然かも膽大的人物也彼れ又情を辨し情に倒る蓋し之れ英雄の天由なり常則にして免かる可からず即ち天性なり情の一字を去らば彼れは萬物の靈長たる人格を備ふるの動物に非らざと難せざるを得ざるなり古諺に曰ふ英雄色を好むと此金語又能く象次郎の性行を推すべし彼れは多情家也色欲家を以て知られたり恰かも阿龍の龍馬に於けるが如く伯の小仲に於ける情事又大に似せり小仲は三本木某樓の妓にして容華秀麗加ふるに才機あり艶名高かりき象次郎爲めに芳盟を訂し兩情相喻り後購ふて正室と爲す小仲は嘉樹芳を聯ね春光之老後に譲にす今の伯爵後藤夫人即ち之也彼れ象次郎の多情多涙なる又彼れが人物の如何を明かにし得らる所にして實に彼れが長所たる所ならんか

象次郎の最后

鋭敏卓見の彼れは自由民権の論を首唱し雄辨を揮ふて能く社界の風潮に乗し機を失せざ大聲疾呼して大同團結の必要を説述し以て國家の狀態を痛論せり彼れは明治廿一年七月の炎天を侵して信水越山の峻山峻河を跋渉し尋て三陸岩盤兩羽の諸州に陟り熱血を灌いて國家萬般の事業上に就き明論卓説を試み有爲の士に感動を興へし者幾何ぞや殊に我國の外交の不備不完全なるを主張し明治法權の不當條約の不正を改正し帝國議會を設け憲法の發布等の如き國家の重要なる問題の眼前に横はり益々將來多事なる旨趣を辨明し大に社界の輿論を奮起せしめ彼れの名望四面に現はる次で從二位逓信農商務大臣の榮職に當り益々彼れの聲名以前に倍し大政治家と稱贊せられたり而して後ち彼れは遂に病痾に犯され幾くなくして風前の露と化し去りぬ嗚呼偉大の俊才を失へり惜むべき人傑を亡くしぬ吾人何んぞ悲まざるを得んや

大久保甲東

天性沈毅寡黙周密なる彼れ大久保利通は天保元年を以て生る父を治右衛門と云

ひ姓を藤原と云ふ母は皆吉氏より娶る家世々薩藩主嶋津久光の家臣なり君は名を正助後ち市藏と云ふ甲東と號す幼時より勤王の志深く稍々生長するや容貌魁偉にして自ら峻嚴す可らざる態度を備ひ衆輩一瞥畏服するの傾きあり藩の舊慣上異郷の壯者と交誼を禁せられたり是れ各郷相互に於て文武の道を競争し以て勉學の志を衰かしめんが爲めたりしなり蓋し甲東は常に西郷大山の同郷衆と往來して深く交を通ずる所ありし。

彼れは人と爲り沈思方正事に臨んで善く断す軀幹長大容貌端重にして犯す可らず而して人に接する至誠を以てす外には剛を以て内には和をなす能く事に任し物に忍ぶの性を有し已れの爲さんと欲する事は必らず其の志を達す盤根錯節人の耐ゆる事能はざる所も能く之に耐ゆ蓋し彼れが精神の確固不拔なるに非らずんば何を以て之を求るを得んや能はざる也。

甲東年餘未だ二十を超ぬざるに藏方の下代となり後記録所書記助役を命せられぬ次で又納戸に振擱せられたり之れを彼れが藩政機務に參與するの始となりし甲東常に西郷南洲と交密なり共に藩の爲めに盡す南洲は豪爽闊達を以て士林の推

重を受け甲東は沈毅周密を以て君主の信任を全ふす内外相應して之に對し以て薩藩の勢力振へぬ次で西九の側役と轉したり彼れは終始嶋津に仕へ嶋津の意を体して東西に奔逸し公卿諸侯及び四方志士の間に周旋大に努む嶋津の言ふ所一として行はれざるは無かりき之れ實に大久保の力にして又大久保の主腦に出づ之れより薩藩の勢力天下に振ふと同時に甲東の名聲又宇内に喧たり彼れ薩藩の人傑たる利通は政事に熱情を注ぎ學生専門の業となし内務の重職に在りしこと數年なりき其最も力を殖産興業に用へ加ふるに内國勸業博覽會を創設し起業公債を募集して以て土地改良を企圖し又士族授産の方法の如き地方の政務に専ら意を注ぎ其施政の宜しきを得しは彼れが内務大臣たるの時地方官を召集するや皆な其面前に靜肅靡然として喧語する者なく質義も起らず能く是れに服せしと言ふか如きは固より甲東の威嚴慎重なるに基因す也雖も其の政務の施行完全せしや吾人の諒する所ならん彼れは公生涯に關する事多くして私生涯に屬する事甚だ少なかりき而して其政見たるや始終内治主義を取り地方の行政に着眼して其政務の舉らん事を欲したるは甲東の最も有力なる要點にして亦た是れが爲め

に終始一貫内治主義を固執したる所以ならんか。

### 甲東と征韓論

人 物 と 最 後

明治六年十月十二日利通参議に列せらるゝや征韓論器々として四面に蜂起したり然れども甲東熱考するに方今の急務として内政治まらずして外事に及ぼす此時機にあらざるなり面して木戸の如きは朝鮮の處分論を主張し亦た副嶋後藤板垣江藤の各参議は朝鮮の無禮なる我が使節を御辱を加へまると政論益々危殆にして穩かならざりしに反し利通は今日は所謂文明主義の内治論者に意投せず然るに西郷一派の勢力甚だ旺盛にして當る可らざる有様にてありしが甲東は自説の行はれざるを慮れ此に於て岩倉と相結合して以て遣使事件に斷乎として反對し其形勢を一變せんと欲せしむ岩倉の在らざるより歸朝を待ちたりしなり而して十月十四日遣使を確定せんとし閣議を開くに當り大久保は閣議に先だち豫め各参議の意嚮を内定せんとするも成らず此日太政大臣三條右大臣岩倉参議西郷利通重信後藤板垣大木江藤等皆内閣参集し儼然として正服を着け居並びたり臨

大 久 保 甲 東

席の曰く朝鮮及び滿州の危を辨し遣使の要を述べ儉安姑息するの害を痛論し最後に至り若し自説立たずんば斷然職を去らんと決言せしむ岩倉甲東が急務にあらざる事を駁撃し激論せり論議百出區々として彼我交々切論激駁するや遂に此日は閣議一決せず翌十五日西郷は議を採り奏聞せんとの内意を聞くや大久保は忽然辭職し岩倉其他の反對者は病と稱して出でず其決行の遷延を謀り決議をして動さんとせり十八日西郷参閣して太政大臣に奏聞すべきを迫りしに大臣躊躇し明日を以て右大臣等の参閣なきに於ては余一人にて奏聞すべしと後藤亦た之に従説したり。

三條公憂慮に堪へず稍々精神に異狀を呈し病を以て参閣せず利通此の時に於て岩倉と共に前日決議を讀さんと謀計を試むや西郷合意の参議等岩倉邸を前ひ以て前議を奏聞せん事を要求するも應せず隆盛憤然として曰く咄長袖知事を誤るゝと後藤は怒氣滿面に現はれ岩倉の椅子を蹴て以て退きたり然るに翌日に至るや勅裁を以て遣韓使中止の命に接するや西郷は辭表を懷中より取り出し机上に叩き付け退くや同志の参議舉つて辭職せり。

遣韓使の中止となるや閣僚過半の辭表となり語氣凛然自説を唱へ人心頗る恟々たり而して甲東も亦た職を去らんとなし上奏するや許されず隆盛の親密交情も此に至りて破れ余く別人の如くなるに至れり而して倉岩木戸大久保等は益々親睦を加ふと共に提携一致の運動をなし遣韓使論を打破し内治論者則ち非遣韓使論者として勝利に歸るに至るや利通内務卿を創設し内務卿を兼ね内政益々舉がり従つて利通の権力も亦た大に加ふるに至りたるなり。

甲東と其實權

慶應三年十二月還政の建言容れられて大政復古となるや公卿の柔弱にして意氣應敗し大名より一層甚だしかりき是れ吾人夙に知る處にして亦た驚かざるを得んや然れども其内公卿中に於て稍々其類を異にし頭角を現はしたるは岩倉三條四條の少數輩に過ぎざるなり此に於て大政維新の大業成ると同時に公卿の權勢忽ち地に落ち門閥は強藩の有力者の爲め左右せらるゝの境遇に傾く亦た已むを得ざる形勢なり。

大政成るや職制を改め公卿と大名とを以て首位に置き諸藩の秀才を徴し其の下に參與せしめたり此時甲東西郷等は共に召されて參與の職を奉し大臣の下にあつて實務に従事し主宰する處となれり其責任や重にして且つ大なりと云ふべし。時は明治元年一月太政官を七科に區別し參與員の分掌せしむる事となるや利通は内事務掛となりたり或時君は總裁熾仁親王に謂て曰く此舉たる人心一般の意向悉く快とする處となれり然らば此際機に乗じ速かに車駕を八幡に幸せられ蹕を大坂に移して行在と爲し外交軍事は擧げて此地に整理する可なるべし是れ目前焦眉の計事此より急なる者あらざる可し若しも一時の功に徃れ儉安するに於ては即ち大事を誤る甚だしき者ならずやと建言せり總裁は利通の明説最も可なりと稱賛す此に於てや全く甲東の力にして是れ亦た主として此發議者の一人なりき利通の氣象として撓まず屈せず其議を主張するや奏議の念々其端を啓き議一決して遂に都を大坂に遷すに至れり而して幾くなくして亦た東遷の要を説き更に車駕親征するの令出でたるなり是れ豈に甲東の先見卓識たる是れが實行するの功績顯然たる吾人の知悉する所にして亦た偉と云はんや余輩の深く此點を

賞賛して已まざる所なり。

甲東と最後

時宛も西南の役平定して西郷の遠逝するや、政府は從來敵視せし薩長の爲めに専權微かなりしに今や南洲在らず爲めに其權力自然に増加するの傾向を呈したり、而して權力の増加と共に薩長情實の弊害亦た醸生するに至る、壓制と相伴ふ權力の要點は愈々甲東の身邊に接近し逼迫し來るの形状あり、嗚呼利通の危機轉た此に伏在するか。

西郷甲東兩俊傑は嶋津久光の信任最も厚く水魚も常ならざるの交誼親睦し一意國事に盡精せしも一朝甲東の政府に入るや忽然相反目し離隔し敵視するに至る是れ豈に境遇に制せらるゝの然らしむる處にして凡備の常已を得ざらんや、左大臣嶋津久光公は八年十月を以て意見を提出せしも遂に行れず憤激して退職するや全縣の士族二木仲作なる者あり、彼れは嶋津の意志貫徹せし行はれざるは是れ即ち三條岩倉二大臣の抗妨に原因せる者なりと雖も歸する處利通の隠謀に依ら

人物と最後

大久保甲東

ざる可らず、彼れは舊君の恩誼を忘却して其建言に賛するの念慮毫もなきのみならず、却て二大臣と結託して以て妨害せり、是れ甚だ義に背反する者なりと憤懣措く能はず、彼れ三人を暗殺して以て久光の意思を飽く迄も貫通せざる可らずとなし謀計するや發覺する處となり翌年五月朔され、後五年に處断せられ、嗚呼維れ明治十一年五月十四日は果して如何なる厄日ぞや、早朝より空らかき曇り一天黒烟を張り何時暴風雨降らんやも知る可らざる天候計らざりき、内務卿大久保利通は參朝の途上午前八時馬車にて霞ヶ關の自邸を出で、兩側共に小高く桑樹を植ゑ夏草繁茂し人形も隠すべき紀尾井坂を下り過ぎんとするの際刺客の輩乃に墮る、是れ實に吾人の惜むべき悲むべき事にあらずや、抑も此日たるや降雨の氣色往來人稀にして只前街に書生林の若き男が花を手にして戯れ居るを見て馬丁之を拂ふ、取車馬に鞭つて馳驅するや彼の草中より四人の男現出し各々祖ぬきて筒袖の肌着を袂し長刀を抜きて馬の前足を薙き倒すや一聲嘶きて倒臥す、取者驚愕狼狽の一聲と共に飛下するや兇賊の爲めに斬殺せられたり、而して賊は車中にありし利通の頭を瞥見し支へし手と共に眉間より目際まで切下し、後ち引出し

て數刀亂殺實に無慘の最後を遂ぐるに至りたり。此時馬丁は車の背後に乗り居るや、刺客の迫るを見て魂飛び慌て去つて赤坂門外の分署に訴へ、亦た宮内省へも此兇變を告るや、赤坂分署詰合の警官數人馳せ來り宮内省よりは參朝ありし西郷從道變報に接するや、現場に馳せ着せしに最早事果てたる後に、血液淋漓夥しく流れ馬車内に三ヶ所の血痕あり屍骸横倒慘然たる情實に人目を驚せしむ。後警官は既に現場にありて検視を爲し居るを見て西郷下車し警部に會釋し、檢視の終るや、自ら指揮して遺骸を氈布に包み馬車に載せ同乗して以て利通の自邸に護送せられぬ。

此事變の兇報に接するや、官人車馬東西に驅せ混亂錯雑甚だしく近衛兵は四方の門を嚴重に固め守衛し警察は要所を固め兇賊の縛を勉む折りから麹町方面より六人の男表門に接近し來るを見るや、兵卒等は先に立ちたる巨魁と思しき二人を捕へ誰何するや、彼れ隠せず只今紀尾井町に於て利通參議を參朝の途殺害せり宜しく相當の處分を施されよと申述するや、上司に申答し直ちに分署に通報せしかば警官數人出張して六人腰繩に縛して警視本部へ引致し、糾問せしに此の兇賊は

嶋田一郎、長連、藤田、巧一、杉本、乙、菊、杉、村、文、一、淺井、壽、篤、六人にして一篇の趣意書を携帶せるのみにてありき。吾人は島田一郎外五人の惡漢兇賊の行爲を憎まざるを得、抑も彼れ等は何を目的として利通公を慘殺せしか。沈思周密、孜孜内治行政の改良に熱情を注ぎ、慷慨忠節、憂國敵愾の甲東をして亡失せしめ、以て國家に害を加ふ。吾人曷ぞ遺憾とせざる可らず。彼等は或る一部の反目に着眼し、其根柢眞價を識別せず、狂者痴人にあらずんば、以て如斯愚は爲ざる可し。

凡そ人能不能あり、長短あり、其取る處の主義、其爲す處の方針たるや、萬人擧げて満足するを得ざるは、凡人の凡人たるを證すに足らん。然れども甲東の如き固より凡人なりと雖も、學識高く人の精神を穿ち透明する奇才、卓越せしにあるや、吾人は口はん業の半にして未だ以て其結果を見るを得ざるにあらずや。然るに彼れ島田輩の俗物は、林有造等の流言、懼説に幻惑せられて、事茲に至る何ぞ其意味の甚だしき者と云はざる可らず。

而して利通が遭難數年前、森有禮或時甲東に謂て曰く、公は尤も自愛せざる可らず。余は恐る公、或は藥籠を見て命を終るの人のあらざる可し。と利通大に笑て首肯せ

し事ありと云ふ思へば實に彼れの危難の前徴たるべき乎。

勝海舟

人 物 と 最 後

資性剛毅活潑にして、人傑中赫然頭角を現はせし者は實に勝海舟なり。彼は通稱隣次郎と云ひ、海舟と號す。幼時より西郷南洲と共に、水戸の藤田東湖の門に入り、書を讀み文を講じ學徳大に備はる而して、當時鎖港攘夷の説は滔々として天下を風靡するに當り、宛らよし萬延元年一月外國奉行村垣淡路守新見豊前守軍艦奉行木村攝津守等二百餘人と共に其當時薩藩より獻納せし太元船及び米國の汽船に搭じ米國使節の役を奉じ、板橋せり。是れ我國が歐米に使節を派遣せし矯矢と爲す。彼は大活眼を開ひて桑港に到着するや、米國政府は山海の美味を以て饗應せり。然れども腥膻の臭氣鼻をつき食するに堪へせどなし。蹶然立て、海岸に至り遙かに故國の雲を眺望して以て懷中より握飯を出し食せしと、而して米國內部の各都府を視察するや十九世紀の開化文物は眼前に横はり觀過するに忍びざりき。實に百聞一見に如かきとの里言に感じ忽ち心機開發し茲に始めて鎖港攘夷の朝非にして且是

なる事を嘆息せり。全年十月此一行は恙なく歸朝し幕府に復命せり。其の得たる處の者幾何ぞや。

海舟と開港

勝 海 舟

彼は歸朝以來専ら航海學の必要を認め以て頻りに此學の研究を勉め傍ら砲臺築造等の方法を講究せり。後ち彼は擧げられて軍艦奉行の重職に任せられ、君の名譽益々天下に揮ふ。彼れは初めより眞に開港説を主張し毫も變せず。却て其必要なる事を唱導せり。然れども當時時機未だ熟せず攘夷の輩各藩内に横唱せり。而して彼は土佐の藩の志士阪本龍馬を従へて鹿兒嶋城下に廻航せし事あり。然に連日風濤の頻なるより足を旅亭に止めしが徒然として何の樂むべき者なし。此に於て恭を圍み茶を喫し在し處此時薩人は長と敵視して他藩主と交際するを嚴禁せる折柄なれば彼れと龍馬は餘念もなく恭を圍み居る處へ十四五人の壯者無断に闖入し曰く「クヤ」浪人ども恭を打ツちよるか」と嘲弄するや龍馬は大喝一聲浪人でも恭を打つが何かと云ひければ彼の少年等は門外に逸走せり。此を以て當時士氣の



激烈なるを證すに足る可し、而して彼れは或時水戸の浪士と開港攘夷の是非を激論せしことあり、然るに水戸の浪士等彼れの開港説の不可なるを憤り遂に彼を刺殺せんと迫れり、彼れは泰然足下の言壯なりと謂ふ可し、然れども今各國と兵端を開かば亦た其戦略なかる可らず、足下若し好戦略あらば幸に拙者に告げられ、拙者請ふ足下の爲めに諸大藩に遊説せんと浪士等茫然として是れが殺意を中止せりと以て彼れの豪邁俊す能はざるの人傑たる推して知るべきか。

海舟と敬宇

豪宕なる勝海舟先生會て中村敬宇に告げて曰く余輩の御身達を大切にすることは甚だ失敬なる比喩なるが宛も金箔の附きたる書籍を大切にすることが如く下にも措かず、亦た塵埃も着けず、其尊重する至誠なりと雖も然れども實務の施設を爲すに到りては必然御身達の效を請ふ事を爲さず、權ながら此等の事に至りては我輩苟かに見る所あり、必ずしも古人の言に法らば典辭を質すを要せず、以て事に應じ變に際し莢開ひて豆墜ち水流れて以て渠と成るの作用ありと。

海舟と最後

海舟彼れは眞に世を弄せり、彼れが目に映じ耳に響するや、忽ち評し、忽ち難す、時に怒るあり、悲むあり、時に諧謔人をして嘔飯措く能はざらしむ、彼れは寧ろ其實行者にあらずして、其主唱者なり、然れども彼れが言ふ處、吾人をして深く首肯せしむるに至りたるは、以て彼れが非常の人傑たる事を想像するに足る可し、而して彼れの眼前に何者なし、敢て臆措せず、敢て忌断なく罵倒是れを事とする處を以て、彼れ無常の快樂とせしを見れば、彼れが豪傑たるに耻ぢざる事を知る可きなり、如斯して多年世を弄せし、伯は忽然病魔の侵す處となり、如何に磊落無意に世を送りし、彼の豪傑も、遂に以て風前の火とは化し去りぬ、嗚呼、惜む可き悲むべきなり。

海舟と櫻花吟

思ひなく花見る折はひとくせの樂しとおもふ日數なるらむ  
咲きいでし雲の上野の山さくら昔の憂をおもひこをすれ

山さくら花にたどへしますら雄のすゑは薪となりてはてなむ  
宵の雨の晴れし朝けののどけさにはころびぞめし山櫻かな  
櫻さく日敷のはきは雨風もこゝろわれやとおもひこそすれ  
人知らぬ心の中のわひしさも花のもどには消ゆやしぬらむ  
いたづらに咲きて散るらむ山さくら都にはぢぬいろ香なれども  
咲くを待つはどの日敷はながけれどはやりちそむる山さくらかな

玉乃正履

彼れは幼名辰次郎後ち多門と稱す泰次郎と呼び東平と改む周防國岩國の城主吉川氏の臣なり文政八年七月廿一日を以て藩邸に生る後ち亦た五龍と號す本姓を桂父の名修助と云ふ彼れは初め藩内の儒者玉乃惇成先生の學を受け後ち彼れは京師に上り牧善輔梁川星殿等の諸家に入て勉學す後ち安政二年藩學の助教を兼ね薩主の侍講を爲し舊來の學風を矯正し以て大に一變せり元久元年彼れは更に家軌掛となり舊來に不備不完全なる兵制を改革し新式の制を設けんと欲し大に

唱導せり而して彼れは夫れが爲め益々藩内の志士に忌避せられ遂に其職を去るの己むを得ざるに際會す後ち一村の撫育方と云ふ官に轉任せり尋で元治元年京師に變亂生じ以來長防の諸藩は益々緊急滅亡の秋に逼迫し幕府の施政其の宜しきを得ず愈々多事ならんとす此の時に當り彼れは再び出京して登用せらるゝの榮を負ふ更らに慶應三年參政に進任せられ後ち王政復古の新天地を啓くや朝廷は諸藩に令して公議人を召さるゝや彼れは藩の撰に依り上京す明治元年十月東下の命あり信任益々深く彼れの名望大に知らるゝに至る三年七月民部少丞となり次で八月大藏少丞を兼ね次で民部大丞に專任し正六位に叙さる五年正月親民の處置最も其宜しきを得たるの功を以て其賞として絹三匹金七千圓を下賜せられ六年七月外務省御用掛を命せらる次で七年三月英國人民より我政府に對する訴訟の裁決を委任せられ其終了するや金三百圓賞與せられ八月五日を以て三等刑事に任せらる大審院長代理被命尋で十年三月大山綱良の犯罪取調掛被命六月更らに改めて判事に榮任し年俸四千二百圓下賜せらる進んで大審院長代理となり十一年八月年俸四千五百圓に増俸せられ其年九月遂に大審院長に榮任せられ

たり、次で十五年一月轉じて海陸軍刑法審査其宜しきを賞せられ、紅白縮緬二匹を下賜せらる。後ち彼れは高等法院を開くに當り其裁判長を命せられ、亦た十六年一月十七年二月再び高等法院裁判長被命、尋で十八年第四回の高等法院長となる。其二月一等官相當年俸四千八百圓下賜せらる。後ち正四位に叙し、十九年五月大審院長に任せられ、勅任一等上級俸を下賜せらる。次で八月從三位に叙せられたり。彼れは實に堅忍不拔に富み能く其職に當り精實と熱心とを以て其職を盡せり。彼れの學識と卓見とは世人に尊重せられし俊才たるを余輩の深く確信する處也。

平生と其長所

彼れは平生文事を好み、閑暇ある時は詩を賦し、文を屬するを以て無上の快樂となす。彼れは人となり温厚にして忠純人に接するや、言語至誠容貌に顯はる。其氣象の確固にして、往々惡漢曲者をして自ら屈服せしむるの識眼を有せり。彼れは嘗て其藩學の助教となるや、孜々として熱心生徒を教ゆるに當り、赤誠を灌ひて訓誨最も其の宜しきを得たり。爲めに彼れの門弟中俊才有爲の志士續々として是等は皆な

彼れが平素の蕭陶の然らしむる處たるや、瞭々として日を見るより明かなり。故に今日に至るも、岩國の藩人に文學に熟達せし者甚だ少なしとせず。是れ其の基因たるや、彼れが其當時に於ける訓育の力に依りしなり。如斯彼れが赤誠を注ひて以て能く其職に従事し、又一面に於ては學者俊傑を養成したる其功や、邦家の爲め嘉すべく、賀す可きの至りなら。老や吾人は是れを讀んで以て彼れは如何に赤誠以て盡くされたる其心情を推して知る可き也。

五龍の最後

夫れ王政復古の大偉業成り幾くならずして身を司法官の重職に委ね、邦家の爲め公明正大なる眼光を以て、拳々として其職に盡されたる者誰とかなす。是れ玉乃正履なり。彼れは身を判官に措き、十有數年の長年月を重ね、彼の學識と辨才とを以て善く其の樞機に處し、千難萬苦を排し、公務の爲めに私意を枉けず、愛國忠誠の熱情を灌ぎ、其の宜しきを得、遂に大審院長に歴任し、勅任一等上級俸を下賜せられ、從三位に叙せられたる其榮譽や重く且つ大なりと云ふべし。而して彼れは平素勤勉家

にして思慮を勞する事甚だしく、屢々夜を徹して以て眠らざる事あり、彼れは是れが爲め、往々病を起し、心魂を苦めたる事あり、然れど勤勉敢て意とせず、只管文事に熱注せしを以て、彼れは過度に精神を勞し、遂に病の再び侵す所となり、年六十有三を最後として、復た歸らざるの悲境に遇ふ、誰れか嘆息せざる者あらんや。

末廣鐵腸

末廣重恭、彼れは幼名を雄三郎と云ひ、鐵腸と號す、嘉永二年二月を以て、伊豫國宇和島に生る、幼少の折、父母に遠逝せられ、實姉の力にて、養育せられたり、彼れは年十五才の時、藩の學校に入學し、螢雪の苦學を積み、十八才にして、更らに上甲禮三の塾に轉じ、専ら漢書を研究せり、後ち彼れは陽明傳習録を讀むや、其甘味の在る處を感激し、益々陽明の説を講究し、其得たる處、妙少ならずりき、而して彼は爾後、膽力を養成せんと欲し、或時半夜、愛宕山上に至り、坐禪し、夜を徹して、屈せざりしと云ふ、後ち明治二年、藩校の教授に撰拔せらるゝや、同輩と意見衝突して、激論百出、遂に該校を去れり、依て更らに翌年、東京に上り、大に學ぶ處ありしが、宛も亂世の餘波を受け、遊學

の徒多しと雖も、言論過激の所爲頗る盛にして、放逸の者多く、真正に勉學する者甚だ稀れなりき、故に彼れは卒然立て、京都に至り、其當時有名なる陽明學者春日潛庵の門を叩き、其の益する所の者甚だ多し、彼れは復た去つて、故山に歸り、教授に従事せり、然るに彼は擧げられて、神山縣の屬吏となりしが、幾何なくして、同縣を廢せられるや、愛媛縣に轉勤したり、然るに彼は長官と意見協はず、議論の結果、辭職して再び出京するや、彼れは僥倖にして、大藏省屬に出仕し、雨露を凌ぎ、飢寒を免かるゝ事を得たり、後ち故ありて、職を辭し、八年、曙新聞社主筆となり、偉大の志望を懷き、將來社界に雄飛せんとせられたり。

獄中の鐵腸

彼れは故山を去て、以來、東京に、西京に、神山に、劔脊、瓢零、風塵、僚倒、一貧洗ふが如き難關を排し、其の得たる處の學藝、幾何ぞや、彼の學識と其の抱負とを以て、大に社界を風靡せんとし、滿腔の赤誠、溢るゝの餘り、過激の論評、奴々として、紙上に掲載せり、時宛も政府は新聞條例并に讒謗律を發布せり、彼れは遂に其規則の網に罹り、禁獄三

ケ月罰金三十圓の處刑を受けたり蓋し新聞條例に違犯したる者は彼れを以て囑矢とせり彼れ期充ち出獄し昭新聞社を去つて九年一月朝野新聞社に入るや君は稍々世人に知らるゝに至れり而して故成島柳北と共に復た官吏譏謗の罪を以て禁獄八月罰金二百圓の處刑を受け、銀治橋内監獄應の獄に呻吟するの悲運に際會せり然れども豪毅の彼れは端然大笑して曰く天余に閑日月を興ふ是れ賜まのぞや何を憊倖なる是れ洋書を勉學するの好場所好時機なりとて、日毎に英語獨案内を手にして以て自學自修す世は益々洋學の必要に迫まれるを以て切嗟琢磨英書を講究し遂に語學に略通するに至れり而して彼れは十四年肥塚龍大石正巳の輩と共に大同團結を組織せんと欲し、上野精養軒に有志を會合せしむ遂に事成らず然るに幾何ならずして自由黨の起るに際し彼れは雀躍して其の黨に贊同盡澤せり次で其の常議員となる是れより彼れが名聲は益々天下志士の中に振ふに至れり然るに彼れは後ち同黨と意見の齟齬する處あり去つて馬場辰猪大石正巳等と謀り獨立黨を組織せんと欲し破竹の勢を以て奔走したり。

鐵腸と米國遊學

偉大の志望を抱きし彼れ鐵腸は歐洲全土を漫遊するの必要を感じ二十一年米國に向て抜錨し尋で歐洲に航し英米の二國を歴遊し政治文學宗教商業工藝等の重要なる者を視察し大に益する處あり將に全歐を雄飛せんと欲せしに豈に計んや二十二年二月十日を以て憲法發布の大典を舉行するに際會し果せずして歸朝せり爾來朝野新聞の主筆として専ら鐵筆を揮ふて以て大に社界に説述せしが故あつて全社を去り更に東京公論社の聘に應じ是れが主筆となる是の時に當り宛も後藤象次郎は我が邦の政黨を見るに萎靡として振はざるのみならず四分五裂して軋轢するの不可を切論し小成を捨て以て大同を取り協同事に當るの必要なる旨を主唱せしかば彼れも復た新富座の演說會に出席し雄大の辨舌を揮ふて以て施政上の主義を解説し大同團結の必要を結論し其贊成の意を發表せしかば滿場の席數千の聽者轟然として迅雷の落下するが如き拍手喝采はしばし止まざりき而して彼れは大同派の委員となり常議員に列せらるゝや彼れは公論の旨意た

る中立を標榜し政黨以外に立つ者にして全々意見の相反する者なるを以て東京公論社を辭したり幾くもなくして大坂に獨立黨員菊地侃二伊藤徳三豊田文三郎等相謀りて同黨の機關新聞則ち關西日報を刊行するや彼れ招ねかれて是れが主筆となり専ら熱筆を揮ひたり。

小説家としての鐵腸居士

政治家として文學家として小説家として社界の風潮に乗じ能く其機を失せず世論に訴へて以て己の意見を吐露し世人舉つて尊敬せし者誰れとかなす是れ即ち鐵腸居士なり彼れは朝野新聞の主筆として在るや小説家の假面を装ふて以て政事上の意見を頻説し傍ら落葉のはき寄雨前の櫻軋轢の原因等當時の政事社界に於ける要書を著せり以て二十三年未來記雪中梅開北鷺の如きに至りては古今未曾有の聲價を顯はし以て大に世人に感動を與へたり而して彼れの人物たるや政治に文學に小説に其言論の巧にして當時の社界に與ふる所の效偉大なるや推して知る可き也。

鐵腸の最後

學識卓越し豪毅勇邁の鐵腸居士は幼少より堅忍不拔の氣象を有し己れの信ずる處は他く迄も是れを貫徹せんとするの氣概を備へ政治に文學に小説に其の爲す所のもの一として世人の賞賛を受けざるはなし而して彼れ鐵腸は先見の明に富みしと雖も鐵腸の如く能く時事に涉り世務に通する者は甚だ稀なりと云ふべし、彼れの才と學と相待つて完備せし古今未曾有の人物と云ふも或は過言なからん殊に我國帝國議會開設を見るや君は撰はれて議員となり政治舞臺の一人とはなりぬ而して頭角を議場の全面に顯はせり其勢力や推して知るべし計らざりき彼れは賣出しの抑も其初めに於て病魔の胃す所となり遠逝不歸の客とはなりぬ嗚呼惜しむべき也彼れの死は當時の政海を落莫せしめ文壇界又頓に肅たり今や吾人をして秋風落葉の感を起さしむる所以のものを知らば彼れの人物たりしや明かなり而して彼れの最後や惜。

沼間守一彼れは本姓を高梨と呼び舊名を真次郎と稱す弄花生亦たは不二樓主人と號す家世々幕府に仕ふ彼れ長ずるに及んで専ら泰西の兵學を研究するの必要を認め以て他日世界に立つて大に爲すあらんと年甫めて十五才の時長崎に遊び熱心以て佛國の兵法を練習せり是れ安政六年なりき而して彼れは益々其の兵學に熟練し衆人の欽慕する處となり遂に砲兵司令官に推舉せられ戊辰の役に際し官軍大擧して江戸に侵入するに當り幕府の麾下數萬の士は當時恭順と抗戰との兩派に別れ其何れか決する處を知らず此時彼れは奮激措く能はざる爲に恭順論者の首魁たる勝安房をして第一に屠殺せんと欲し抗戰派の勇士をして厲さしめしも事成らず遂に奥羽に轉じて百計を企て官軍と對戰大に惱まさせたり彼れが軍略智謀の奇なる亦た思ふ可きなり而して幕府全く倒れて維新大偉成るや彼れは板垣退助の招きに接し土藩に赴き練兵教育の任に當り後ち明治五年大藏省屬に出仕し執務するや尋で司法省に轉勤し後ち歐米諸邦を遊歴し歸朝したり其益す

る處甚だ大し後ち彼れは元老院書記官に榮任し専ら職に執掌せり然るに同僚河津と意氣協は老遂に斷然意を決して民野に降りし也。

沼間と雄辨

彼れは慷慨の思想に富み政治家として詩學者として改進黨の領袖として當時社界の民臣に尊重せられし彼は明治十三年以來國家の輿論翕然として國會開設を主唱し政治思想益々旺盛に傾き地方の民臣相結合して以て其主義とする所の政黨を擁立し多事たらんとするの時彼れは時事に感ずる所あり切齒扼腕禁する能はず聊か我が志望を達するの期に逼れり此の機に乗じて成すあらんとし軀を政治社界に托して以て我が改進黨を擴張せんと欲し彼れは嚶鳴社を創し政論雜誌を發刊し以て京濱毎日新聞の社長となり改進黨を組織し其の主義を明晰にし持論を世人に發表したり十四年十月大隈大藏卿職を辭し民野に墮ちしを以て彼れは大隈伯をして改進黨の總理に迎へ矢野文雄小野梓嶋田三郎等の志士是れが兩翼たり股肱たり彼れ四人は尙説を唱道し改進黨を主張し東奔西走以て雄辨を

揮ふて隆に説述するや、改進黨續々として其數を加へ自由黨をして壓服するに至れり、是れ蓋し彼等の熱心なる解説と云はざる可らず、而して彼れは東京府會議長に撰舉せられ其倚子を占むるや、其議論の明確にして而して慷慨悲壯なる實に世人の名望を博したるや多し、殊に彼れは演說會場に臨むや雄壯の辨快濶の説は以て當時の世人に感動せしめ、刻苦經營世論に訴へ針々とし血を見るの想あらしめたり、彼れの辨才誰れか驚かざる者あらんや。

沼間と兄弟

彼れ兄弟は長を須藤時一郎、次を沼間守一、高梨哲四郎とす、時一郎は若實方正、密を以て名を博し、哲四郎は雄辯卓見者を以て名聲を挙げたり、彼は兄弟の間に於て之を補助し且つ指導して三人相並んで社會を動搖せしめたる者は實に守一の力と云ふ可きなり、而して其後須藤高梨の兄弟は撰舉壇裡に競争を試み互に軋轢を生じたり、而して此の擧たる若し守一が生存し居るに於ては世の非難を避くるの手段を取る事を得たるならん、當時の世になきを以て遂に兄弟の間に於て之を制

する者なく、爲めに斯る變事を演るに至りしは余輩の實に遺憾とする所なり、知らず地下の守一は如何。

沼間の最後

彼れは民權の擴張者として、言論自由の喚起者として、又た立憲政体の主義主創者たり、彼れ其半途にして而して最も多忙なる時代に於て、天は命をかさき彼れをして、遂に彼岸の人たらしむ、而して彼れの目的は其當時に於て實行を見る事能はざりし、然れども彼が社會的國家的勵念は、遠く十數年の今日に於て最も贊すべき賞すべき成功を吾人に目撃せしむるに至りたるは、蓋し君が至誠の力にして、両手を以て嘉すべきなり、吾人は君の昔日を追想して、一片の涙なきを得ざるべし、而して彼れが最後や、敬悼せざる可らざるなり。

福澤諭吉

彼れは天保六年乙未の歳を以て藩邸に生る父は百介と稱し、豊前國中津藩奥平氏



の士なり、幼少より漢書に通曉し、儒者の名を以て聞へたり。彼れは穎悟容止居然として、宛も成人の如き氣象あり、而して家庭の訓誨未だ成らず。然るに不幸にして大喪に過ふ、彼れは爾來四面に奔走して、學業を厲み大に益する所あり。其後彼は幾くならずして時事に感ずる處あり、慨然立つて、大坂に出で、當時の蘭學者、緒方洪菴の門を叩きて、以て師となし、蘭書を研究し居る事數年にして、業の成るや、彼れは益々精學するの思想勃々として、禁する能はず、依て更らに江戸に上り、英學を修めんとせしも、其當時は西洋の學問傳はるもの甚だ少なく、只蘭學あるのみなりき。故に彼れは更らに蘭學を繕ひ、且つ英學をも獨修せり。實に彼れの卓識と、其の記憶の強き頭腦とを以て、師乏しく書甚だ少きの時に當り、是れを研究したる者誰れか驚かざる者あらんや。蓋し彼の如き人物を求めんとするも、豈に能く得る能はざるなり。況んや未だ會て師と書とあらざるの時に當り、英書を研學したる彼れが才識の非凡ならず、推して知るを得可し。

福澤と洋學研究

彼の才識と滿腔の熱情とを以て、英書を研究したる効や、忽ち幕府の命を奉じ、森攝津守勝麟太郎等に從かひ、威臨艦に搭載し、米國に向て、拔錨す。年二十九才、彼れは歐米に至るや、超凡の才を揮ふて得たるの學や、甚だ少しとせ、彼れ歸朝早々、ブエノストル天辭書は當時彼れが携帶し來りたる者にして、最も有益の書たりしなり、而して幕府は君を擧げて譯官に任せらる。幕府は又た文久元年を以て、竹田下野守桑山左衛門等に命じ、泰西諸國を視察せしむ。彼れ并に松本弘庵、箕作秋坪等、是れが隨行たりしなり、而して復た彼れは泰西の書籍を購求し來り、爾來益々其興義を究むるを得たり。是に至つて始めて、彼れの名聲は天下に響きたり。元治元年十月、箕作秋坪と共に幕府の外國奉行支配となるや、蓋し彼は當時泰西の文化風物に大に感ずる處あり、熟々本邦の將來を顧み、慨然西洋事情と學問の勸と云ふ二書を著述し、以て時俗を警醒す。世人此書の出づるや、始めて西洋の文化風物の真意を知るを得たり。爲めに國家の進歩を容易ならしめたる、其功の偉大なる知る可きなり、而して彼れの著はす處の書たるや、平易簡明にして、一見實物に接するが如き感ありと、實に彼の天才なるに驚かざる者あらんや。

福澤と慶應義塾

人 物 と 最 後

英才非凡なる彼れは當時の國情を憂慮し、西學を旺盛ならしめんと欲し、慶應の始  
め小幡篤二郎と協力して私學校を建て、以て洋學を傳播せしめ、國家の隆運進歩を  
期せんとして、茲に始めて一校舎を創す、是れ即ち今の慶應義塾なり、是れを以て本  
邦に於ける英學校の嚆矢となす、彼れは又米國に渡航して該邦の碩學者と交際  
を結ぶ、才學愈々博識を極め、幾何なくして歸朝し、後には専ら力を教育に盡し、日夜  
焦心苦慮、慘憺として學業を授けて怠らず、華々として勤勉生徒の薰陶、其宜しきを  
得たるを知るや、蓋し近世英俊才物多く、社界に立ち事に處し、以て世人に尊重せら  
れ、名を立て功を奏し、邦家の爲め世論に訴へ、政務に執掌し、或は政黨員に身を措く  
者の出處を尋ねれば、皆な彼れの陶冶を受けたる者多し、是れを以て見るも彼れが  
教授に熱心にして、其訓誨の宜しきや、言を俟ずして明かなり、彼れは又た實學を尙  
び、常に生徒に教ゆるに學は須らく實用に適せずんば、萬卷の書も一冊書のみと切  
言せり、後彼れは明文雜誌を發刊し、大に時事を首唱し、次で泰西の風情を摸擬し、演

福 澤 論

説會を開き、講談を業とする松林伯圓の口演秘訣の其真意を知るや、彼れは演壇に  
上り口を開けば、其の談論確實なる雄辨にして、席上の聽者をして感激措く能はざ  
らしめしと云ふ、彼れは明治十二年府縣會議員に當撰し、其副議長となるや、意見協は  
ず、決然辭職し、後ち同志の輩と相謀り、交詢社を興し、次で時事新報社を初め、以て益  
々社界の民心を補益せり、實に彼の如きは、文才實務を兼ねたる人物をのみ養成せ  
り、以て教授の其當を得しや、證するに足るべし。

福澤と天爵

吉 論

論吉は我が國の洋學の首楚として、日本をして歐米文明化せしめたる基因者たり、  
其功績や偉大なりと云ふべし、而して彼れ論吉をして其の功を表彰する爲め、朝廷  
は勳位を賜叙するの内意ありき、然るに彼れは之に應せず、爵位は宛も犬の頸輪の  
如し、天爵は望むと雖も、人爵は望まつとなし、之を辭せりと云ふ、後ち朝廷は其の赤  
誠に感じ、慶應義塾に對し、金五萬圓を下賜せられたり、  
嗚呼、彼れは實に異人なり、世を解したる達人也、今や徳は破れて、正義は倒れ、不義は

立つの今日君の如きを見る蓋し世又稀れなりと云はざるを得ず彼れは遠く俗塵を離れて今や天爵を戴く君の名千萬年の後遂に朽さるなり

中野 梧一

彼れの父は名を嘉兵衛と稱し姓を齋藤となす彼れは天保十三年東京日本橋區馬喰町に生る幼名を達吉と稱し後ち姓を中野と改め名を梧一と變ず幼少より文武の道を修業し長するに及んで雄辨を以て稱贊せられ亦た理財の道に富む彼れは年十五歳のとき聘せられて評定所留役を被命萬延元年三月三日水戸藩の浪士等共謀して彦根藩主井伊掃部頭を櫻田門外に於て斬殺し逃走往く處を知らず彼れは幕命に依り探偵監察の職を以て暴徒を縛し文久三年徳川家茂の洛上に際し彼は其隨員となるや此時に當り開鎖の論起り世論遂に勤王佐幕の二派に別れたり彼れは始めより佐幕論者の一人なりき同二年幕府は長藩を討伐するに當り彼れは幕に從屬して長門に到り硝煙彈雨の中に東馳西驅猛威を振つて奮戦突喚數十人を斃し屍死累々たり而して彼れは身に傷創十餘を負ふも意どせず大に戦功あり

人 物 と 最 後

り次て戊辰の役となるや彼れ亦た東軍の大隊長として數日續戦鳥羽に向ふや官軍と鋒を交へ敵優勢にして勝つ能はざるを以て退却す六日天黒烟を流て雪降る三明官軍此機に乗じ我が軍を襲撃す我軍周章狼狽遂に支ふる能はず將軍慶喜公は騎馬に鞭つて以て漸く紀州に遁走する事を得たり彼は此戦に我軍の敗れたるを慨し後ち一軍を統べ意氣赫々勇猛叱咤奮戦絶叫して曰く此れ君家の危殆城亡の秋なり君家の汚名を灌ぎ武名を擧げ大に挽回すへき時なり此機失すべからずとなし北風凜烈粉骨粹身劍光閃々たる險を冒し猛戦突撃すと雖も如何せん敵優勢にして余軍敗を取るの悲運に遇ふ此時に當り楠公を迎へ項羽を呼ぶも豈に能く軍將の術を施す可きなし後ち慶喜公は紀州を遁れ關東に下るや志士と會見し防戦の可否を議す彼れは奮然として曰死を決し厚き君恩に報酬し武門武士たる功績を立てんと欲す然とも衆悉く彼を目して輕擧を爲す者とし賛意する者なく爲めに慶喜公に従ひ水戸に行きたり彼れの猛戦謀略も又た時運の然らしむ處嶽に已むを得ざる也

中 野 梧

奥羽戦争と中野

寒風凜乎として毗裂け皮膚切れんとするの時、彼れは榎本大鳥松平等の名將と相謀り、奥羽に馳せ、松前を過ぎ、函館に到る、其間異策奇計宜しきを得、諸城を陥落し、速戦連勝進んで五稜廓に據る時、宛も東軍脱兵を集めて、突然福山城に襲撃し來る、時十月下旬北風凜々として、膚を劈き、執銃する能は、老彼の先見能く、此事あるを豫知し、六十餘個の濁酒を醸造し、之を士卒に飲ましめ、胃寒を凌ぐを得たり、衆皆な彼の異才あるを賞美せり、然るに官軍大兵を以て臥山下、寒川村より進撃せり、此時榎本大鳥等五稜廓に依り、桔梗野に奮戦し、彼れの智略を以て官軍を破砕せり、進撃して前川に戦ひ、亦た撃つて之を責めたり、然るに官軍函館より大野村に直進して、東軍を背撃す、決戦二晝夜に及ぶ、東軍屢々勝を得たり、然れども兵糧に欠乏加ふるに、孤軍重圍中にありて、頗る困難を極む、而して官軍の將西郷吉之助、大久保市藏、木戸幸一、郎等協議して、以て榎本大鳥の策をして降る事を勸告せり、此に於て、榎本大鳥等熱々考ふるに、西軍衆寡敵す可らざるを悟り、共に軍旗を巻いて、軍門に降りたり、而

して榎本等は江戸に押送せられ、獄屋に投せらる、次て明治三年朝廷特典を以て、榎本等を赦免せらる、而して此を以て其戦の激烈にして、勇猛を振ひたるを知らん也。

官海に於ける中野

彼れは夙に眼光を洋學に注ぎたり、而して明治七年十一月山口縣令に兼任し、從五位に叙せられたり、彼れの施治を企圖するや、明決果斷衆人に先達して、以て難職に當りて屈せず、撓まず、庶務の整理を圖りたり、而して其の人民に接するに當りては、最も温愛仁慈を以て、事務を處辨したり、故に彼の名聲、噴々として、頗ぶる施治の功績を顯したり、八年六月朝廷上下阻隔し、民臣の言上に通せざるを憂慮し、此に始めて地方官の會議を東京に開設せり、而して各府縣の知事、令を召集せられ、彼れ乃ち上京し、議論百出、言語快説、卓絶にして、頗る會場に於て、耳目を惹けり、而して會議離散するや、彼れは深く時事に感ずる所あり、大坂に歩を止め、忽然辭表を提出し、民間に下り、爾來専ら實業界の人とはなりぬ。

實業家としての中野

彼れは我國の實業界の萎靡として振はざるを慨し野に降て大に商工業を喚起せんと欲したり而して彼れは第一着に我帝國の形勢を觀望し社界將來を顧みれば地球上氣候上各國に稀有たる此の國家と人民とを以て特有の國産を振起し之を製作して以て世界各國と交易し富國強兵を圖り文明の域に達せしめんとなし時

中野と藤田

藤田傳三郎は關西唯一の實業家を以て聲名赫たり彼れが今日は夫れ實に思資中

野梧一の賜となす彼れは其初め有馬温泉に遊ぶや知らざりき中野梧一と其旅館に會す當時中野は山口縣に縣令たりし談論久ふして意氣亦相投ず遂に兄弟の約を盟せり之れぞ藤田が中野と交を通せし抑も又初めなりし然るに藤田は商業上の失意より剛毅變じて自暴となり日夜暴酒に之れ耽り殆んど無頼の徒たらんとせり某日酔ふて路傍に睡りしに馬車の音隣々として君の傍に進み來るや車を止め下るや寐り居たる君の頭を靴にて踏み蹴り急き馬車に乗つて一鞭馬車は遙かに往きたり蹴られし彼れは其痛に目を覺し大に憤り雲を霞に馬車の方向に對し追跡せしむ其姿を見る事を得ざりき彼れは口惜しかれと思ふも如何共すべき術なきを以て親友なる徳嶋某の許を訪ひ其旨を告ぐるや是れを感めて其事を推し中野の許に使を馳せ書を以て其深意を聞けり然るに其蹴りたるは彼れが嘗て有馬の温泉に兄弟の交りを爲せし中野梧一なり如斯約を爲したる彼れが今此の始末を爲すを見て氣を起さしめんと欲したるなりと又此徳嶋は中野及び彼れと交際あるを以て斯くは取計はれぬ而して後ち横濱港に豪商の間へ高き長州出身の山城屋和助方へ彼は徳嶋某と封書に記し金百圓を入添書を以て横濱に出發到着

するや山城屋に至り添書を示せしに殊に待遇厚く内實は容なれども表向は手代として日々商業に従事し此に始めて實業家となれり後に至り彼の封書には徳嶋と記しあるも全く中野よりの依頼書にて金百圓も中野の手より出で徳嶋は命を受け取扱たる事明知しければ彼は大に感じ且つ喜び是れ中野が余をして全く獨立心を起させんが爲めなりと思へは益々其の厚意を謝しぬ而して後ち山城屋は非常の借財の爲め身を置き難く自刃して亡き人となり其家竟に滅びければ中野は彼をして更らに大坂の豪商大賀幾助方の手代に轉しかば彼は重々の厚意を謝し喜び居りしが開運の緒となり是れより後ち大賀の業務を助け時に氏が陸軍省より兵靴の受負をなし爲めに非常の損耗を來たし殆んど破財の厄に沈臨せんとするや君は恩人中野に乞ふて其細密を語たり金三萬圓を借り是を以て再び業務に着手し漸く之を回復し大に面目を改めたり若し中野の美譽なかりせば何を以てか彼れが事業を回復し彼れが目的を遂行する事を得べけんや蓋し能はざるなり中野が藤田に對する萬事如斯彼れは藤田の人物を達觀し藤田亦た中野の偉才を待慕したるにわらずんば何を以て斯の如きを得んや之を要するに中野の藤田

に於ける交や其の尋常にあらずして殆んど兄弟の友も相及ばざるが如ければなり彼れは尙ほ藤田と協力して商業に熱心し藤田組と稱し商會を設け官廳と人民との間に於る西奔東走し當時の治政に適切なる營業を爲し名聲大に振ひ遂に三歳の童子も藤田組を知るに至れり斯の如き有様なるを以て其の得たる利益は巨萬に達し彼れの目的を遂げたり而して彼れは明治十二年九月不幸にも官の嫌疑を以て藤田と共に泉州境なる南宗寺に捕はれ東京へ護送せられ幾何なくして其の疑晴れ免れて大坂に歸りたり而して彼れ等は如何にして此の嫌疑を受けしやは固より官の秘密に屬し其眞意を確むる事能はずと雖も彼れ等は短年月を以て巨萬の財産を蓄いたるより世人の非難攻撃を受け其の説の盛なりし結果と云はざる可らき當路者曰く彼れ等賈造紙幣事件は彼れ等をして世の耳目を惹起しぬ然れども余輩未だ其眞相を明かにせざるもの聊か端を記して以て參するのみ

中野の悲終

中野梧一彼れは開港以來實業界を振興せしめ喚起せしめたる人傑なり彼れは眞

に日本商人の智識を開進せしめ商業界を活潑ならしめたるの功や甚だ大なり殊に大坂に於ける商人は面目を改め一變せしめたる又尠少ならせどなす彼れは其の當時商業會議所を大坂に設け國家の經濟上に補益したる功も亦た著るし彼れは斯の如く我が商業界を活潑に振起せしめ躬は巨萬の金を積み國家經濟に及ぼしたるの功偉大ならずとせず然るに彼れは一身上言ふ可からざるの事實に遭遇し遂に發狂の餘り短銃を以て咽喉を突き墓なき無慘の最後を遂ぐ嗚呼恐る可きは人物の最後なり事に熟し物に凝して果ては精神の紛錯となり遂に慘事を演ず然れども徒らに彼れは私情に倒れたるにあらせして一に社會を思ふて也身を殺して仁を爲す所謂君子の行を以て終りたるもの也而して彼れが半生中の經歷や實に嘉すべく又服すべし吾人は常に人物の最後を想する毎に梧一氏の昔日を悲嘆するもの也

河野敏鎌

古人曰へり名は實の積なりと宜なる哉河野敏鎌の半生又然りと爲す彼れは實に

敏鎌の特長を以て遠く世人を服せしめ而して名實全からしめたり彼は眞に敏鎌の二字を以て立ち敏鎌の二字を以て社會に鳴り敏鎌の二字を以て最後の人となりぬ彼は幼少より伶俐の性を備へ能く其變を察して機に應ずるの異才あり以て尋常ならざる事と知るべし彼は高知藩の出身にして世々藩主山内侯に奉仕す君長して後王政維新の偉業に風雲に際會するや尊王討幕論を唱道して世論を喚起せしめ爲めに世に名益々知らるゝに至る忽ち撰拔せられて遂に文部卿たる重職を負ふに至れり隨て朝野に尊重せらるゝに至る宜なり而して彼れは大隈伯と共に社界の氣運を察知し自由民權の伸張するの必要なる事を建議せしに在廷貴顯と意見衝突し議論滔々として辨難せしも協はず遂に排斥せらるゝに至る此に於てや決然自ら勇退して民野に降り實に彼は民を愛するの深く徒らに公を以て私に變するの人物にあらず而して彼れ又黨人としての經歷を有せり即ち大隈と共に改進黨を組織し協力團結し銳意専心民權自由を説述し以て是れが擴張に精勵し大に自由黨の勢力を裂き壓伏するに至る然るに幾くならせして忽ち社界の風潮に變遷を來し遂に自由民權の説益々萎靡として振さる状態となるや自由黨

解散して改進黨又遂に消滅するに至る之れ社界形勢の如からしむる處爲めに彼の信用と聲價を落しぬ。

### 河野とブルス事件

夫れ彼れは改進黨の旺盛なる時代に於ては大に世人に欽慕せられしも一朝黨勢靡然として振はざるに至るや彼れの軀も隨て落葉たり此に於てや見る所あり身を商業界に投し敏捷なる伎倆を以て其の商機の策略意の如くにして商會に尊重せられ一躍して東京株式取引所頭取に拔擢せられたり然るに偶々「ブルス」の事件の起るや株式取引所を壓倒せしめんと欲するの勢を逞するに至り之れが爲めに取引所は大に爭議を惹起するに至る彼れは此時非凡の手腕を揮ひ徹頭徹尾之に反抗し粉骨碎身斃れて後ち止まんと決心し東奔西馳意氣堅豪天資の才と畫策とをして縦横に斬り廻り或は言語或は紙上に喋々怒々大に訴へたり而して其結果たるや彼れは仇敵と和議を結ぶに至る是に於てや昨の讐敵も今日の兄弟となり忽ち相和合して一大「ブルス」を設置するに至る如何に彼の策略變幻出沒にし

### 河野敏謙

て仇讐をして自ら屈服せしめたる推して諒するに足る而して後ち彼れは帝國議會開設の秋に際會するや議員撰舉上に於ても其の競争の間に處するや千變萬化能く敵陣の隙を窺ひ奇計を放つて遂に勝利に歸したりし彼は議場に立つや辨論の明晰にして敵軍と雌雄を相争ふや場内を振動せしめ能く彼の欠点を捕へて以て遂に勝つと云ふ其の偉大の卓見と策の奇なる誰れか之に應ずる者あらん。

### 江藤新平と河野

彼れは眞に智仁勇の三者を完備せし人傑なり既に彼れが「ブルス」事件を軟化結了せしめ後ち亦た帝國議會に立つや一睨以て三百の議員を威服せしむるの活眼を有し口を開けば場内爲めに靡然明論卓説以て其真相を穿ち議員をして感動を與へたる尠少ならざるなり而して彼は常に江藤新平を敬慕し氏に就て法學を研究せり彼の學識を備へたる推して知るべき也而して江藤も又た彼を観る心ありて深く愛撫せり後ち江藤は佐賀に亂を起し官軍と勇奮せしも遂に勝つ能はずして捕へられ審問の結果斬刑に處せらるゝに當り彼は江藤の眼貌を眺望し其剛邁



勇○膽○な○る○恩○師○の○情○を○追○想○す○る○や○思○は○す○二○三○步○を○退○ぞ○き○悲○然○と○し○て○嘆○息○せ○り○と○云○ふ○子○弟○の○情○や○又○興○り○し○な○る○べし○然○れ○ど○も○公○事○須○ら○く○至○誠○な○ら○ざ○る○べ○か○ら○ず○私○情○の○爲○め○に○公○を○曲○げ○誣○を○以○て○天○下○の○大○義○を○誤○る○が○如○き○は○元○より○敏○謙○の○學○ば○さ○る○所○也○其○資○師○新○平○の○斷○頭○臺○上○に○見○ゆる○當○時○を○追○想○せ○は○情○あり○涙○あ○る○吾○人○の○感○や○果○し○て○如○何○敏○謙○の○心○中○又○深○く○察○諒○せ○さ○る○を○得○さ○る○也○

河野の最後

彼○れ○は○維○新○大○偉○業○に○際○し○俊○才○賢○人○と○相○結○托○し○て○以○て○王○宮○の○微○式○を○愛○ひ○能○く○機○を○察○し○變○に○應○ず○る○の○異○才○あり○故○に○彼○れ○は○尊○王○討○幕○論○を○主○唱○す○る○や○一○躍○し○て○文○部○卿○た○る○榮○職○に○推○舉○せ○ら○れ○専○ら○國○事○に○執○掌○せ○し○も○當○時○の○貴○顯○と○議○の○合○さ○る○所○あり○俄○然○職○を○辭○し○民○野○に○降○り○爾○來○改○進黨○を○團○結○し○大○隈○伯○と○共○に○銳○腕○と○揮○つ○て○黨○勢○擴○張○に○盡○粹○し○東○西○に○馳○せ○て○唱○道○せ○し○も○社○界○の○流○潮○に○變○化○を○來○し○自○然○黨○務○の○萎○靡○に○傾○く○を○以○て○彼○れ○は○實○業○界○に○身○を○投○じ○天○資○の○才○と○伎○倆○と○を○以○て○忽○ち○舉○げ○ら○れ○て○東○京○株○式○取○引○所○頭○取○と○な○り○千○變○萬○化○其○の○向○ふ○所○意○の○如○く○に○し○て○商○界○に○一○新○面○目○を○放○

ち○彼○の○奇○策○と○其○敏○腕○を○し○て○世○人○を○驚○か○し○む○る○に○至○れ○り○然○る○に○計○ら○ざ○り○き○彼○れ○復○た○遂○に○命○運○の○彼○岸○に○達○し○ぬ○然○れ○ど○も○人○に○死○す○可○き○の○時○あり○又○倒○る○可○き○の○場○所○あり○を○彼○れ○は○死○す○べ○き○の○時○に○死○せ○ず○倒○る○可○き○の○場○所○に○倒○れ○ざ○り○し○最○後○を○悲○む○も○也○彼○れ○は○國○家○多○事○の○秋○神○經○病○の○爲○め○に○自○か○ら○咽○喉○を○突○て○無○慘○の○最○終○を○告○げ○り○理○由○な○き○根○據○な○き○死○を○吾○人○に○傳○へ○り○嗚○呼○悲○む○べ○く○惜○む○べ○き○は○人○物○の○最○後○也○

山城屋和助

彼○れ○は○天○保○七○年○を○以○て○長○門○國○玖○珂○郡○和○泉○村○に○生○る○姓○は○野○村○と○云○ひ○名○を○正○風○と○號○し○通○名○を○三○千○三○と○稱○す○後○ち○和○助○と○改○む○山○城○屋○は○家○號○な○り○父○は○醫○業○を○な○す○彼○れ○は○其○第○二○男○た○り○幼○に○し○て○資○性○穎○敏○を○以○て○名○あり○き○父○は○彼○れ○を○僧○と○な○す○長○ず○る○に○及○んで○諸○國○を○遊○歴○し○益○々○其○の○流○義○を○討○論○解○説○し○遂○に○關○東○に○來○り○て○行○徳○に○步○を○止○め○大○志○を○起○し○報○國○忠○盡○を○以○て○自○任○せ○り○文○久○年○間○偶○々○長○藩○と○幕○府○と○隙○を○生○ず○彼○れ○憤○然○と○し○て○曰○く○長○藩○の○危○殆○を○す○く○う○此○の○時○に○あり○と○な○し○長○髮○し○て○歸○藩○す○然○る○に○高○杉○晋○作○は○既○に○其○隊○を○募○集○す○る○に○會○す○彼○れ○忽○ち○之○れ○に○加○入○せ○り○後○ち○元○治○二○年○俗○論○

黨をうつ彼れは之に従がひ大に功ありたり然るに幕府は大兵を擧げて長門を撃つや彼れは兵を率ひて之に向ふに當り馬關に至り大將高杉に協力して彈丸雨中を奔走し身を抛て戦ふ遂に重圍を破つて豊後洋に至るや幕軍其奇略に驚き室津以西の海濱に更に敵兵を見る事を得ずと彼の智略其の敢なる如斯明治元年 天皇の東に下るや彼れ又た是に隨ひ越後に赴き會津藩と激戦遂に敵城を陥落し次で若松の城を陥る此に於て 天皇凱旋せり。

二十萬圓と生糸商

彼れは高杉晋作と共に幕軍に抗し勇敢絶倫の功を奏し凱旋するや後ち去つて横濱に寓す偶々感あり世の形勢今や一變せんとするの傾向を示す宜しく決する所なかる可からず窃かに信ず將さに歐米文明の交通や期して近きに在り吾人は豫め此期に投じて打ち勝つの覺悟なかる可からず我は之れより艱苦經營以て後天下の商權を握り一大富豪たらんことを希圖す大丈夫たるべきもの何ぞ夫れ確といて小事に汲々すべけんやと茲に決意一番して實業に身を投じぬ彼れは先づ屋

號を郷の山代に因みて山城屋と命じ某氏を訪ふて二十萬圓を借り之を以て福嶋地方に趣き生糸を購ひ忽ち横濱に輸送して後ち在留の外人に賣り數萬の巨利を占む之れは君をして幸福の第一着歩にして又此一事彼れをして實業の嗜味を知らしめたる抑も初めなりき後ち彼れは商店を南仲通三丁目に移し専ら營業に従事す然るに彼れ嘆じて曰ふ彼我の貧富強の懸隔何ぞ夫れ甚だしきや是れを考ふるに我國の商人たるや其商機を計り敏活なる働きをなし人に先んずる氣力にとぼしきの致す所に由ると謂ざる可らき此時に當り我國の萎靡不振の商界を挽回し東洋商人の醉夢を覺破せしめぬ彼れは以て事に當つて熱誠若し果さずんば一死を抛つて國家に報せんとの志を懷き孳々として業務を精厲し以て信用を博したり後ち某官省の用達を命せられぬ彼れは此機失す可らずとなし忽ち歐米に渡航せんと欲し明治四年十二月二十七日横濱を解纜し英米佛獨を遊歴し至る所の商品を購求し文明の商況を視察し五年七月廿三日歸朝するや將來に於ける貿易上に利益を興へ日夜刻苦厲精して數萬の巨利を得たるのみならず當時の商業界を革進せしめたる功偉大なり而して彼れは人に語りて曰く男兒功なくして死せ

ば何んぞ草木を撰まん世に安逸娛樂を冀ふものはありと雖も是れ我が素志にあらざるなりと彼れの尋常ならざる精神や斯の如くなるを知らん也。

借財と一命

西哲曰く人を成就する者實に安逸にあらずして勤勉にあり容易にあらせして艱難なり故に人は必らず百般の困難に當り其の苦と相戦ひ打勝つにあらざれば以て其業成らざるなり彼れは眞に熱心勤勉商業界に益する功甚だ少しとせず而して彼れは業務に當る赤誠着實にして人を籠絡するが如き意なく爲めに信用益々厚し後ち彼れは明治五年を以て某官省より借りる所の金額大略六十五萬圓あり此内金十五萬圓の返期限れり然れども彼れ返済するの道なきを以て一ヶ年の延期を請ひしも入れられず此に於て更に抵當品を入れ高島嘉右衛門を以て保證人と爲さんと欲し便を高島方へ遣はせしに是れ亦た請ふ所を諾せず彼れ落膽して熟考せり然るに官は堀越角二郎富田屋源七郎等を以て代へん事を命す彼れ亦た二人に請ふ肯せせ此に於てか彼れは周章狼狽憂慮して己ます然れども死は固より

最後の白刃

り我の甘んせざる所事茲に至る己むを得んとなし一命を以て之を債主に抵しぬ。資性穎敏の彼れは歐米と交通期迫れるより此機千載の一遇たり此れに處する幾しめ覺悟なかる可らずと忽然身を商業界に投し我國商界の改進者として進勉以て商機に當り赤縣の文化を視察し東奔西馳外人と交易頻なり而して彼れの氣運や幾何ならずして巨萬の財を集め一大豪商と誇るを得ると共に一面には商業界をして革進せしめ隆々として旭日の如き勢ひ名譽益々世人に聞ゆるに至り富豪として其名高かりき然るに彼れは幾多の辛酸と忍耐とを以て斯の如く得たる利益の財貨も商機に失敗を重ね數十萬の借財と變化し向來彼の榮譽も妖夢の如く辛苦艱難も水泡に歸し悲運に陥いるの境遇となり遂に進退谷まり復た如何にもする事能はざるに至れり此に於てや彼れは負債の辨償すべき道立たず之れに處する方法手段もなく遂に明治五年十一月二十九日を期とし白刃を揮つて喉を貫き自ら屠腹して死す嗚呼惜むべき最後乎。

遺書と遺歌

左は彼れが臨終の際遺書の寫なり聊か記して讀者に參す

以書願上候

私儀元來山口縣野村三千三とす者に伊座候去る辰年北海道脱走の一舉起り候處彼の脱走の内密かに當港へ渡海政府の舉動を伺ひ候様の風聞有之候につき内命を蒙り商人と身をやつし當港へ住居いたし候て人別を小田原在佐藤又右衛門弟と改め今日まで商業取引し來り候處今般無餘儀官借に迫り進退維れ谷り困窮の餘り遂に決死の覺悟仕候就ては右又右衛門并に一類の者まで私身の上事更に存じやす候間死後必らず迷惑に立ち至り不才候様奉願上猶又私身代の義に付ては官借はじり外國人其他もへ數々取引有之候處定めて御手数相掛り候事と奉恐縮候前書上候件々何卒格別の御寛典を以て跡へ残り居り候召仕者へ迷惑に相成不才候様伏して奉願上候

壬申霜月二日誌

山城屋和助

山城屋和助

此度の事件皆様へ不容易は心勞相掛奉恐縮候私事も種々心を盡し候得共時々刻々暮しと相成り最早手段も盡し難く家名相續すべき目途も無之候につき死を以ては諸中上候何卒跡々ひまどめの事も急々片附間敷愚考罷在候につき成丈け跡に残り候者へ迷惑に相成不才候様格別御寛典の御所置奉願上候全く私の不所存より出來候とは乍一錢にても身分勝手に不仕此先一ケ年も是まで通りに勉強いたし候は少しは安心の目途も相付可すと東西へ奔走日夜勉強仕居り候處豈に圖らんや此度の事件實に無餘儀次第に伊座候に付ては前書上候通り跡々始末方の儀何卒御寛典の御所置幾重にも奉願願候

壬申霜月

山城屋和助

此遺書を以て當時の彼れが内情を窺ふに足るべき也彼れは又知友に左の歌を贈れり

世の中にその名も高く山しる屋開けて御代の土どこをなれ  
譽れある越路の雪ときゆる身をなからへてこそはつかしきかな

此詠歌抑も彼れの最後たり彼れは深く決し而して世と訣れん事を覺悟せり

人 物 と 最 後

襄は幼時より氣慨心に富み正義正道を重じ魏然として藩内に頭角を顯はしたる者彼を措て他に肩並する者なかりき而して君は上州安中藩に生れ世々藩士たり幼名を七五三太と稱し父を是水と號す彼れ長するに隨ひ幕府の施政日に月に氣ひ外交の事多端に傾き人心今や騷然たらんとするの時代に當り君は大に其當時の形勢に感ずる所あり外國宣教師ニコライに就て國館に學ぶ是れ文久二年の事なりき而して彼れ海外遊學するの急なるを悟り遂に決心して元治元年六月十四日夜國禁を犯して以て密かに米國商船に投獄し勞役夫となり一意専心難を排し凡そ一ケ年の星霜を経て米國ボストン府に到着するや僥倖にも同國の義俠人士の爲めに好都合を興へ懇篤に取扱はれたり而して彼れは夫れよりアーモスト天學に入學し亦た更らにアンドヴァン學校に學び前後都合十餘年の積雪の苦學を積み益甚だ少なからざりき而して其間米國の文物制度の隆盛なるを觀察し貴顯紳士に接し之れが明論を叩き益々米國內の真相を穿ち且の教育の完備せるを慨

し以て教育は國運の消長に係るを信じたり彼れは此時より死以て教育事業に盡さんとするの決心を懷きたり其早見なる尋常人の及ばざる遠き乎

教育實況の視察

彼れは文明の教化を甘味し熱心勤學怠らざりき時宛も明治四年故岩倉特派全權大使の一行の米國に渡航せるとき文部理事官田中不二麿も歐米諸邦の教育實況を取調べのため此一行にあり當時彼れはアンドヴァンに在て勉學中徴せられて文部理事官隨行の命を受け理事と共に北米中重なる學校を視察し更に轉じて歐洲大陸に赴き獨佛英瑞蘭丁露の諸國を巡歴して其學制に關する百般の事業に就き觀察講究し以て其の益したる點甚だ少なからざりき而して愈々歐米文明の基礎は國民の教化其宜しきを得し結果たることを確信し此に於てや我國民をして文明の域に進め歐米文明の諸邦を駢馳せんと欲せば只たに外形的物質上のみならず其根本たる教育をして改革せざる可らずとの意を起し後日歸國の上は一大私立學校を設置し邦家の爲め竭さんと自ら誓願せり

新 島 襄

訣別と演説

彼れは文部理事官田中不二麿等と、歐米諸國の教育を視察し別れて後ち亦た米國に出航し再びアンドウア神學校に入校し、明治七年に至り其全科を卒業し歸朝せんとするに當り、偶々北米合衆國外國傳道會社の集會の催あり、貴顯紳女の會する者凡三千人の多き彼れは朋友の誘引に依りて其の會に臨席せしに訣別の辭を求めらるゝに及んでや彼れは豫て平素の宿志を開陳せんとする觀念を懷きしを以て此機得たりと即ち之を演て日本の文化に美光を來さしめんと欲せば須らく歐米文化の大本たる教育に力を用ひざる可ずと、赤誠の涙を揮ふて更らに一歩を進め予歸國の上は誓つて此事業に力を盡さんと欲す、滿場の諸子予が赤心ある處を看取し幸ひに翼賛する所なきかと云ふに至りて其語未だ終らざるに、滿場の貴顯紳女之を激發して即席數千金の義捐を得たり以て彼れが如何に教育に熱情ありしか吾人之を推して知らん也。

人 物 と 最 後

私立大學設立と苦心

彼れは歐米に於て勤勉華々として十有餘年の久しき不撓不屈一日の如く匪勉し業成りて歸朝せり、後ち彼れは明治八年一月故内閣顧問木戸孝允に謁見し、大に宿志を吐露するや、公は深く其意を賛稱し爾來専ら政府の間に奔走して其の志のある所を貫徹せしむるの力を藉されたり、夫れより後彼れは山本覺馬と相謀り同年十一月を以て私塾學校開業の許可を得るや、此に於て京都寺町丸太町の家屋を以て初めて同志社英學校を開きたり、然れども當時は語學研究甚だ微々として振はるるも彼れの熱心と其忍耐の力は間斷なく機關を運轉せしめ、遂に其目的の所在に推進せしめ、爾來十餘年の星霜を経、明治二十一年に至りて始めて彼の宿志たる私立大學の建設に着手するを得る場合となり、同年四月西京に東京に各紳士貴顯を運動し大に容れられて賛成益々多きに至る、彼れは又た米國に拔錨して同國の知己と謀りしに是れ又た容られて歸朝時に二十二年なりき、此に至りて彼れは年來の宿望は漸く達するの端緒を得たり。

新 島 襄

襄と最後

後 最 と 物 人

彼れは鋭意熱心國家前途の教育を憂慮し幕府の禁を侵して以て歐米大陸に遊び、其の得たる利益其感したる者幾何ぞや而して彼れは我が日本の文物と歐米の文物と比較する雲泥の差あるを慨嘆し歸朝するの曉にはと大志を懐いて研究し業成り歸國と共に私立大學を設けんと企圖し既に之が竣工に着手するや無情なる病魔は益々彼れの身軀を侵し來れり而して是れが病因たる彼れが五六年前大志を懐いて歐洲を漫遊中アルプス山を越ゆる時俄然心臓に疾患を發せしむし以來平素身軀に纏綿して離れざるより廿二年來相州大磯に轉して専ら療養せしに廿三年一月十六日より腹膜炎を繼發し藥石其の効なく遂に同二十三日を期し復た歸らざるの旅装となりぬ嗚呼誰れか彼れの遠逝を悲まざる者あらんや

維新の人物と最後終

明治卅四年十二月廿二日印刷  
 明治卅五年二月四日發行

著者 岩崎 徂堂

發行者 服部喜太郎

印刷者 龍雲堂 大場 沃美

\*\*\*\*\*  
 不許  
 複製  
 \*\*\*\*\*

發行所 求光閣書店

東京市京橋區本材木町三丁目廿番地

東京市神田區南乘物町十五番地

東京市京橋區本材木町三丁目廿番地

能辯  
獨修

# 會席演說摸範

附討論指南

正價 金廿五錢 郵税金六錢

郵券代用不苦  
頁數 貳百四十頁  
洋裝 全壹冊

文章ニ法アルカ如ク演說ニモ亦法アリ本書ハ第一編ニ演說ノ構成トシテ論理ニ關スル規則ヲ  
掲ゲ音調態度熱心膽力信用及ビ結論ノ各章ニ別々更ニ章ヲ分ツテ數十節ヲ設ケ明晰ニ說述シ  
タリ第二編ハ演說ノ方法トシテ商業ニ關スル演說工業ニ關スル演說農業ニ關スル演說祝吊ニ  
關スル演說公共ニ關スル演說教育ニ關スル演說政治ニ關スル演說ノ各章ニ分テ實際ニ臨ミ演  
說ヲ爲ス方法ヲ示シ卷尾ニ討論指南トシテ討論ノ体裁及ヒ方法ヲ叙シタリ殊ニ本書ニハ演說  
ニアレ討論ニアレ一々圖解ヲ附マタレハ何人ニモ一讀以テ了解シ得ヘキ有益至大ノ良書也

特價 金三拾錢 郵税金八錢

頁數 三百廿頁  
洋裝 全壹冊

## 陸海軍人送迎演說摸範

附祝辭吊祭文例

東京市京橋區本材木町三丁目二十番地

發行所 求光閣書店



